

其は

聖なる御遣い

なりや

逢いたい。

逢いたい。

逢いたい。

もう一度、めぐり逢いたい。

強く想っていた。

何度生まれかわっても、その想いは消えなかった。

もう一度逢いたい。

同じになりたい。

そばへ行きたい。

今度こそ、手を繋ぎたい。

ふたりで駆け出したい。

一一ひたすらに、想いは膨らんだ。

一日、一年、十年、百年……

過ぎ去る時間を横目に、ただ待っている。

『いつか』を夢見て、ただ待っている。

ヒトとして、この星であなたに逢える日を。

あなたを一一。

大きな石に座って空を見あげたら、いつもと同じ灰色をしていた。あれが雲と呼べるものなのかは、残念ながらぼくにはわからない。ただ前に映像で見た雲は、もっと白くて空を泳いでいたような気がする。

「風がないから、泳げないのかな？」

すいと手を掲げて、それを確かめた。

肌をなでるのは、生ぬるい大気。微かに動く程度で、到底風と呼べるものではない。

視線を、大地へとおとす。

この星を真似てつくられたはずのコロニーとは似ても似つかない、空と同じ灰色の地面。かつて植物と呼ばれていたものたちが、その身を黒く変え這いつくばっている。そのせいか、遠くを見やっても天と地の暗い境界は曖昧で、まるで互いに姿を映すようだった。

「きっとこの星は、鏡でできているんだ」

周りに人がいたら笑われるだろう台詞も、ここでなら遠慮なく口にできる。

(そうだ)

だから大地に緑が戻ればきっと、空もよみがえる。

よみがえってもらわなくちゃ、困るんだ。

「――よーしっ、今日も頑張るぞ！」

伸びながら気合を入れて、ぼくは石から飛びおりた。着地した瞬間、衝撃が足の裏から頭の上までひゅんと走りぬける。同時にぱりぱりと、黒い塊が崩れる音。やわらかさなど微塵もない地面は、ぼくをうんざりさせた。

「まずはここからか」

顔をあげて、寄せていた眉をもとに戻す。

(さあ、仕事をしよう)

両手を身体の前に伸ばし右手で、大きく開いた左手の小指を掴んだ。小指の先、ちょうど第一関節のあたりから、くるくると外側にまわしてやる。

痛くはない。

そもそもこれはぼくの命を繋ぎとめるためのキャップであり、最初からはずれるようになっていたんだ。

だけど同時に、だからこそ簡単にはずれては困るものなので、開けるためには少々の時間がかかる。

(ぬぬぬぬぬ……あ、取れた)

まわす右手が疲れを感じはじめた頃、右手と左手がきれいに離れた。ぼくは右手に持っているキャップを落とさないように注意しながら、先のない左手小指をそっと傾ける。

音もなく、一滴。

鮮やかな赤が上から下へと落ちるのを確認してから、すぐにキャップを戻した。今度は内側に、ぐるぐるとまわす。

はずすときとは違って、戻しおわるタイミングはわかりやすい。なぜならぼくの両手以外にも、変化するものがあるからだ。

目はすでにそれを追っていて、指先を見ていない。

(赤い、点)

燃えつきた跡に残ったような、赤いぼく。

ぽっかりと地面に浮かんだそれは、一瞬だけ色を失ったあと、周囲の灰色を連れて空へとのぼってゆく。

ゆっくりと、ゆっくりと。

邪魔をする風も鳥もない空へ、還ってゆく。

それが完全に見えなくなるまであごをあげてから、ぼくは、「空が灰色なのは、ぼくたちのせいもあるのかもしれないな……」

呟いて、笑った。

「そうだよ」というように、まわしすぎた小指が「きっ」と鳴った。

(おっと)

右手を休ませて、もう一度地面を見やる。

灰色が抜けた範囲は、ぼくが両手を広げてくるりと一回転したくらいのちいさな円だ。けどたった一滴でこれだけ浄化できるのは、ぼくにとって毎日「おはよう」って言えるくらい、とても嬉しいことだった。

もっとも、灰色が抜けたからといってすぐに緑を取り戻せるわけじゃない。取り戻したのは普通の茶色で、ぼくがやるべきことはもうひとつあるんだ。

腰の右側につけている、そう大きくもないウエストポーチに、そっと手を差し入れる。なかには決められた数の種が入っていて、ひとつも落とすわけにはいかない。

慎重に一粒だけ取り出したら、今度は腰の左側につけているシャベルを手に取り、やわらかくなった地面を掘る。もちろん種を埋めるために、だ。

「よしっ、これでいいな」

穴に種を入れて、かぶせた土をポンポンと叩いた。ぼくがやれることは、ここまで。

種には発信機がつけられている。埋められたことをセンサーが感知すると、この星のなかを周回しているポットロボットが飛んできて、定期的にきれいな水を与えてくれるんだ。それがちゃんと続けられたら、今はこんなちいさな円でも、いずれはもっと大きな円になる。

ぼくはそれを、くり返す。

歩いては立ちどまり、立ちどまっては空を見あげて。

それがぼくの仕事だから。

(ぼくの、仕事)

大地にぼくの命を、分け与えること。

この星で一一死を迎えること。

そのためにぼくは、この星に降りることを選んだ。

ひとりきりで、生きたかったから。

ひとりきりで、死にたかったから。

本当なら、ぼくだって病院のなかで待ちたかった。シアさんならきっと、手術を終えた直後でもぼくを捜してくれると思ったから。でもそれができなかったのは、ぼくが周囲の視線に耐えられなかったからだ。

『手術中』の赤いランプを見あげながら、部屋の前にただ座っていただけなのに、通りすぎる人はみんなぼくのほうを見ていた。なかには、「その赤い眼と髪は手術で治るのか？」と、かかってきた人もいた。

(なんて、ちいさいのかな)

他人との違いが色だけであることを、ぼくはちゃんと知っている。遠巻きに眺めているだけの人たちだって、いい加減気づいているはずなのに、見て見ぬ振りをしているんだ。色なんかに動じないでっかい心を持っているのは、親愛なるシアさんだけだった。

外にいるだけじゃ人目は変わらないから、ぼくは病院を取り囲むように植えられている茂みに、身を低くして隠れていた。シアさんが出てきたらすぐわかるように、正面玄関に目を光らせる。日曜の病院は見舞い客のせいで混みあっていたけど、さいわい隠れているぼくに気づく人はいなかった。

——いや、いないはずだった。

「なにやってんだい、クソガキ」

でいんと、突然降ってきたこぶしと声。

「いでっ」

自分でも情けないと思うような声をあげながら振り返ると、そこには前から出てくるはずの一

「シアさんっ？」

気配も音もまったくなかったから、気づかなかった。裏から出てきたんだろうか？

口を閉じることができないまま見あげるぼくの視線の先で、シアさんはにかりと笑う。

「尻隠して頭隠さずだぞ？ 季節はずれのクリスマスでもやるつもりか？」

「うっ」

つまり、ぼくの髪の『赤』がばっちり、『緑』の茂みの隙間から見えていたということだ。

(うう、恥ずかしい……)

シアさんにはいつも、「人の目なんか気にせず堂々としていろ」と言われているけど、うなずくぼくはまだ一度も、そんな態度を取れていないんだ。

ごまかすように視線を泳がせながら、ぼくは話題を変える言葉を探す。

(シアさん)

大手術を終えたばかりだっていうのに、ずいぶんと元気そうさ。しゃきっと直立していたし、必要以上に露出された肌に包帯などは見られない。

「——手術、どうだった？」

訊いてみたらシアさんは、ひょいとしゃがみこんでぼくの耳に口を近づけてきた。それから息

を吸う音が聞こえて。

「だんだんと、人間じゃなくなっていくようだったよ」

「え」

星へ降りるための手術が、とても大掛かりなものであることはぼくも知っていた。だからわざわざこんな大きな病院まで出向いてきたのだし、手術を受けるために何日も待たされた。

(でも……)

人間じゃなくなっていく？

それが一体どういうことなのか、ぼくにはよくわからない。

そういう顔を隠さずに向けると、ぼくの耳から顔を離れたシアさんは豪快に笑って。

「あっはっは、なんて顔してるんだ、クソガキ」

「だって……」

今度はその顔が、赤みを帯びてきてしまう。

(あんまり笑わないでほしい)

シアさんは他の人よりも大きな乳房を持っているけど、肌の露出が多いせいでその重さを満足に支えきれしていない。だから笑うたびにかなり揺れるので、ぼくはまだ十二年ほどしか生きていない子どもながらも目のやり場に困ってしまうんだ。

当然それを悟っているのだろうシアさんは、熱くなる顔を抑えられないぼくの頭をぼんぼんと二回叩いて。

「じゃあな、マセガキ。ここでお別れだ。もう逢うことはないだろうけど、あんたならひとりでも大丈夫だよ」

「え……？」

細められた目から、流れるようにくりだされた渾身のウィンクに、ぼくは完全に動きをとめられた。

見かけは女性フェロモンが服もほどほどに歩いているみたいな感じなのに、中身はびっくりするくらい ^{おとこ} 漢らしいシアさん。飽きっぽくて投げやりで、その場しのぎで豪快なのに、つい昨日まではぼくの手を握ってくれていた。嫌われ者のぼくがそばにいることを、許してくれていた。

(ぼくはシアさんの特別なんだって)

そう、思っていたのに。

目の前にいる今日のシアさんは、ぼくのことなんてとっくに割り切っているようだった。

「シアさん」

この手術を受けるということを聞いた日から、覚悟はしていた。でももう少し猶予があるものだ、ぼくは勝手に思いこんでいたのだった。

「ぼくは……」

(シアさんしか、「おはよう」って言える相手がないんだ)

情けなくて続けられない。

こみあげる涙がぼくの喉をふさいで、別れの言葉を告げずにすむように企んでいるようだった

。

「……………っ」

「泣くんじゃないよ」

みっともないから隠そうと、顔に手を持っていった。けれど目はその手を裏切って、シアさんの肌を受け入れる。

——抱きしめられたんだ。

「シアさん」

シアさんの乳房はやわらかい。ぼくはこの胸で育ったわけではないけど、よくこうして抱きしめられていたから知っていた。

だからすぐに、気づいた。

「体温が、おかしいよ」

いつもと違うところ。

「鼓動も……匂いも」

普通じゃない。

普通の人間の、ものじゃない。

「だんだんと、人間じゃなくなっていくようだったよ」

さっきの言葉を、思い出した。

「シアさん」

「それでも、ちゃんと人間さ。あんたに手を差し伸べないやつらよりはね」

「シアさん」

冷たいシアさんに、体温を分けてあげようと手を伸ばした。

「シアさん」

「なんだい、それ以外の言葉はないのかい？」

「シアさん……」

少し迷って、続ける。

「——行かないで」

耳もとで、シアさんが笑った。

「……それ以外の、言葉はないのかい？」

(わかっている)

シアさんが欲しいのは「さよなら」だ。

乱暴で大雑把で、曖昧で世間知らずなのに、シアさんはいつもあいさつにはこだわっていた。

「目を見てちゃんと返せないやつは、人間のクズだ！ クソ以下だ！」って、そんなことを公衆の面前で叫べる人だった。

(だからこそ)

それを言ってしまったら、本当にお別れ。実際星に降りるまでの数日間も、もうぼくとは逢ってくれないだろう。

「シアさん」

言えるわけがない。

それが今まで一緒に過ごしてくれたことへの、感謝の気持ちになるとしても。

(ぼくはそれを口にできるほど、大人じゃない)

「シアさんが星でめぐり逢う『聖なる御遣い』が、ぼくだったらよかったのに」

「へっ!？」

かわりに口にしたい希望は、シアさんをずいぶんと驚かせたようで。シアさんはぼくを抱きしめていた腕を放すと、そのままぼくのひたいを指で弾いた。

「痛いよ」

「こんなマセガキに育ったのは、あたしのせいかなあ」

呟いて、弾いた場所に今度は唇を押しあててくる。

「シ、シアさんっ」

「――またな、リム」

どんと突き放されて、ぼくの背中が地面と出逢った。その突然の出逢いに、ぼくは満足に反応もできない。

立ちあがったシアさんは少しの遠慮もなくぼくに背中を向けると、驚くほどのスピードでぼくの視界から消えてゆく。

(シアさん)

ぼくとは違う意味で、見る人はみんな振り返るシアさん。

あたたかいはずのぼくの涙がその肌をぬらしても、最後まで変わらなかったシアさんの体温。

最後まで変わらなかった、決心。

それを見せつけられたぼくは、しばらくその茂みから動くことができなかった。



シアさんがいなくなって半年、ぼくはシアさんが住んでいた部屋に住みつづけていた。海沿いにあるボロアパートの一室。普通なら、家賃なんて払えないぼくだ、追い出されたって不思議はないのに、大家さんはなにも言わなかった。どうやらぼくの行動をある程度見越していたシアさんが、いくらかの家賃を払っておいてくれたらしい。それでも大家さんの視線がきついのは、ぼくがお金を払わないからじゃなくて、いつもの理由なんだろう。

(ぼくが初めてここにやってきた日から)

その目は変わらない。

口は悪いながらもやさしい目で微笑んでくれたのは、シアさんだけだった。

「シアさん……」

もう呼んだって返ってくる言葉などないことがわかっているけど、口に出さずにはいられない。ぼくはシアさんが使っていたベッドの上に身体を預けて、初めて逢った日のことを思い出していた。

もともとぼくは、近くにある孤児院で暮らしていたんだ。物心ついたときにはもうそこにおいて、虐げられていた。一応育ててはもらえたけど、明らかに他の子どもと扱いが違っていた。

——だけどぼくには、感謝することしかできなかった。

「どうして怒らないんだい？」

他のみんなは遊んでいるのに、ぼくだけがひとり庭の草刈をしていた。そんなとき、通りがかったシアさんが垣根の向こうから声をかけてくれたのだった。

爪のあいだまで茶色に染めて必死に草を刈っていたぼくは、手をとめてあたりを見まわした。ぼくに声をかけてくれる人なんているはずないと思いながらも——希望は、捨てられなかったから。

やっと視界の端にシアさんを捉えると、シアさんはおそろしくきれいに笑って。

「あんたはいつもひとりで仕事してるね。やらされてるんだろ？　なんで怒らないんだ」

「だって……」

ごはんをもらえなくなったら。

なかで寝かせてもらえなくなったら。

そう考えると、ぼくには口を嚙むしか選択肢が残らなかったんだ。

そしてそのときも、それ以上続けられなかったぼく。

シアさんはひとつ息を吐くと、なにを思ったのかひょいと垣根を越えてぼくのそばまでやってきた。そして汚れまくっているぼくの手をとって。

「あたしはあんたの世話なんかするつもりないけど、あたしと来るかい？」

ぼくはなぜ自分がそうなっているのかも理解しないまま、顔を赤らめていた。今思えば、それは嬉しさも恥ずかしさも、そして垣根を越えたせいで見えたシアさんの服装のせいでもあったんだろう。

気がつくのと、うなずいていた。

それを見たシアさんはにんまりと唇の端をあげ。

「よし、じゃあ行くぞ！」

そのままぼくの手を引っ張っていこうとしたのだった。

「ま、待って。りむの手汚い……」

「あたしゃ気にしないから大丈夫さ！」

——その言葉の意味をぼくが正確に知ったのは、この部屋についてからだ。

(びっくりするくらい、汚かったもんなあ)

そしてそれを気にしていなかった。だからぼくがどんなに片づけても、一日も経てばもとどおりにになってしまうんだ。

だからこの部屋は今も、汚い。

洋服も下着も脱ぎ散らかされたままだし、雑誌も食べかけのハンバーガーもそのまま。ぼくがいつもどおり片づけてしまったら、もう二度と汚れないことはわかっているから。どうしても片づけられなかった。

今じゃもう、ぼくだって気にしていない。

(結局、シアさんの言うとおりでよかったよ)

シアさんは本当にぼくの世話なんか焼かなかった。むしろぼくがシアさんの世話を焼いていた。掃除も選択もマッサージも買い物も、言われたことも言われぬこともなんでもやった。でも孤児院にいたときのようにつらくはなかった。シアさんはぼくとちゃんと会話してくれたし、感謝もしてくれた。

目を見てくれた。

あいさつを教えてくれた。

「あんたならひとりでも大丈夫だよ」

今ならその言葉も、受け入れられる。

ぼくは少し身体を起こして、ベッド脇に置いてあるサイドボードから、ちいさなりモコンを取り出した。それから再び横になり、上に向かってリモコンのスイッチを押す。

かなり汚いシアさんの部屋だけど、たったひとつだけ常にきれいな場所があった。それは――天井だ。

どこからか微かなモーター音のようなものが聞こえると、スクリーンがわりになっている白い天井にひとつのホログラムが映し出される。

ぼくはこうして横になって、シアさんとふたりでこれを見るのが好きだった。何時間見ていたって映像は変わらないけど、そのまま眠りこんでしまうまで見ていたことが何度もあった。

それは、青い星。

今は汚れてしまった、あの星のホログラム。

「シアさんは今、ここにいるんだ……」

手を伸ばしても、届かない。

もう二度と逢えない場所。

シアさんがそこに憧れていることは知っていたけど、まさか「行く」と言い出すとは思っていなかった。

(突然だったもんなあ)

実はシアさんが女性らしいのは、外見だけじゃなかった。汚いこの部屋にもたったひとつだけきれいな場所があったように、中身漢らしいシアさんにもたったひとつだけ、女性らしい内面があったんだ。

それは――

「なありム。『デザート・ドルフィン砂漠のイルカ』ってロマンチックだと思わないか？」

それを聞いたときぼくは、正直「また始まった」と思った。

「それを言うなら、『デザート・フィッシュ砂漠の魚』でしょ？」

砂漠はあの枯渴した星の比喩。魚は、それをよみがえらせるために向かった人々の比喩。一度星へ降りた人は、二度と帰ってこられない。死亡率は百パーセントといわれていた。まさに、砂漠に住もうとする魚なんだ。

そのとき、こうして星を見ているぼくの横にいてくれたシアさんは。

「魚じゃロマンチック度が足りないんだよ！ ここはイルカだイルカ。『デザート・ドルフィン砂漠のイルカ』！ ほ

ら素敵 」

手を振りあげながらそんなことを言った。

(そう)

シアさんは、極度のロマンチストだった。

そもそもシアさんが星に降りようと決めた理由だって。

「^{デザート・ドルフィン}『砂漠のイルカ』は、一度星に降りたら死ぬまでひとりだって言われてる。大きすぎる星に比べて、向かう人数が極端に少ないからね。……だけどリム、だからこそロマンチックだと思わないか？ 一生に一度、逢えるかどうかもわからない相手！ 逢えたとしても異性かどうか、好きになれるかどうか、好きじゃなくても身体を預けられるかどうか、わからない恐怖ッ！ ああっ、ドキドキするう〜〜 あたしゃそういう恋がしたいのさ」

「……シアさんて、恋人がいたこととかないの？」

「恋人はいないけど、『聖なる御遣い』ならいたよ」

「聖なる御遣い？」

「大切な人のことを、よりロマンチックに表現するとそうなるんだ。^{デザート・ドルフィン}『砂漠のイルカ』になつて『聖なる御遣い』を探す——これ以上にロマンチックなものはないねえ」

本当に幸せそうな表情で、シアさんは口にしていた。

そしてそれを実現するためだけに、本当に星へ降りてしまったのだった。

ぼくをおいて。

たったひとりで。

死にに行った。

それさえも。

(ロマンチックなことだと、思っているのかな)

死刑のかわりとしても使われる星送りだ、誰かと出逢えたって死刑囚であるかもしれない。死ぬ前に殺されるかもしれない。でもそんなこと、きっとシアさんにとってはたいした問題じゃなかったんだろう。

見つめる視線の先で、くるくるとまわりつづける青い星。ずっとずっと前はこんな色をしていたこの星も、今ではまっ黒なのだという。そもそも青という色は、自然界ではもっともつくりだしにくい色だと永いこと言われていたのに、どうしてこの星はこんなに青かったんだろう？ そう言い出した人は、この星が青く見える理由を研究したりしなかったんだろうか。

「……なんてね」

こうしてひとりで寝転がっていると、本当にどうでもいいことばかり考えてしまう。話し相手がないことが、こんなにつまらないことだったなんて、シアさんに拾われる前までは気づいていなかった。これからはきっと、このつまらなさに慣れてゆくのだろう。

だってシアさんみたいにやさしい人なんて、そうそういるわけじゃない。シアさんだって持ち前の厚かましさでそれをよく理解していたから、ぼくに「ひとりで大丈夫」なんて言ったんだ。そうでなければ「他にもいい人と出逢えるよ」って、ぼくを励ましてくれていたはず。

ぼくはこれからずっと、ひとりで生きていくしかない。

ひとりで死んでいくしかない。

髪も眼も、そう簡単に色は変わらない。

ぼくも変わらない。

——それなら。

「ぼくも、行こうかな」

呟いたときは、まだ本気でそう思っていたわけじゃなかった。半分はなんとなく、半分はやけくそで、黙っていてもどうせ死んでいくんだから、それでもいいかって感じだった。

(ああそうだ、そうしよう)

だけど実際に自分の言葉を耳にしたとき、それがこれ以上ないほどの名案であることに気づいてしまった。

この青い星に憧れていたのは、ぼくも一緒なんだ。ここにいてもひとりなら、なんの役に立たないよりも、星の役に立ったほうがいい。星で死んでわずかでも肥やしになるなら、生まれてきた意味があるってものだ。

(シアさんに逢える)

そんな可能性はほとんどないことはわかっている。でもシアさんならきっと、ぼくが追いかけていくその事実だけで、ロマンチックだと喜んでくれるだろうから——。

ぼくはむくりと上半身を起こすと、足をずらしてベッドからおりた。洋服やごみを踏まないよう注意しながらドアへと向かう最中に、ふとまだ続いたままの微かな音を思い出す。

振り返ると、ぼくを見送る青い星。リモコンはベッドの上に置いてきたので、取りに戻るのは面倒だった。

「——またね、シアさん」

今、行くから。

あのときのシアさんの真似をして、ぼくはその部屋を出た。その足で役所へと向かい、星へ降りるための申請をした。

許可を得るためにはふたつの条件がいるのだということは、以前シアさんから聞いていた。

ひとつには、それが百パーセント本人の意思によるものだと確認できること。もうひとつは、家族がいる場合にその同意があることだ。

シアさんもぼくも家族はいないから、自分の気持ちさえちゃんとしていれば、弾かれることはなかった。ぼくの場合はむしろ、年齢のほうが心配だった。年齢を制限するはっきりした決まりはないものの、未来ある子どもをそういう場所に送りこむのはよろしくないという風潮があったからだ。

でもぼくが申請書を提出したとき、窓口の女性はとても嬉しそうな笑顔でそれを受け取り、ぼくを検査室へと通してくれた。そして身体全体に管のついた吸盤を取りつけられ、「本当に行くつもりか」と確認された。これは嘘発見器のようなものなんだろう。

「はい」と、ぼくは答えた。

シアさんがいなくなってから、初めて他人に聞かせた言葉がそれだ。それだけだ。

気づいたらおかしくって、笑ってしまった。もしかしたら、嘘発見器の数値に変化が表れてい

たかもしれない。

それでもなんの問題もなかったようで、白衣を着たおじさんたちは顔をしかめながらも『許可す』のはんこを捺してくれた。一週間後には、星へ降りるための手術をしてくれるという。

(シアさんは申請から手術まで半年かかったのに)

ぼくは一週間。

今は星へ行く人が足りないだろうか？

もっとも、通常人としてはそちのほうがおそらく健康的なのだろうけど。

それから手術までの一週間で、ぼくは勉強に費やした。ぼくが星について知っていることは、すべてシアさんからの伝聞でしかなかったから。なぜ青色を失ったのか、人が住めなくなったのか、ちゃんと知ってから行ったほうが楽しいだろうと思ったんだ。

(どうせ行くなら、楽しまなきゃ)

一生懸命浄化して、シアさんと同じ空気を吸って……って、そういえば、あの星には酸素がないんだっけ。

昔は緑にあふれたたくさんの酸素が人の暮らしを支えていたけど、ときが経つにつれ二酸化炭素の量のほうが増えて、人の健康に害を及ぼすほどになっていったらしい。そこで半年離れた同じ軌道上に擬惑星——コロニーがつくられて、人はそちらに移り住んだ。

それがここだ。

気温も天気も思いのままに快適だけど、どこか物足りない場所。つくりものであるがゆえに、壊れるときは一瞬だろう。自然のように緩やかに壊れてゆくなら対応もできるけど、あっという間に動かなくなってしまっただけでどうしようもない。もちろんそうならないように細心の注意を払って管理はされているんだけど、完全に安心できるほど人の心は気楽にできていなかった。

だから人々は、一度は捨てた星に再び戻りたいと考えたんだ。戻るために浄化しよう。

星から人がいなくなったあとも、星の汚染は続いていた。今は二酸化炭素も減っていて、かわりにエフノマルク素という毒性の強い気体が充満しているらしい。地上を埋めつくしている植物のなれのはてが発しているらしいのだけど、その生成過程は今のところまだわかっていないようだ。

ただその成分は調査済みで。星へ降りるための手術というのはつまり、エフノマルク素を酸素に変換する仕組みを体内につくるということ。「それができるなら全員にやって星で暮らしたらいい」って簡単に言う人はいるけど、その手術は相当大変なもので、かつ、シアさんが言っていたように「人間じゃなくなっていく」感覚がかなり強いみたいで、やっぱり拒否感を示す人のほうが多いんだ。

血が血じゃなくなって、体温もおかしくなって、心臓が軋んだ音を立てて、それでも生きている。あの手術をすると、食べものも排泄もいらなくなるというのだからすごい。

それはあの星には食べられるものなどないからで、体内でエネルギーをリサイクルできるよう組みこまれているらしい。だけど当然ながら普通の人と同じように寿命があるし、実際はその寿命よりも早く死ななきゃならない。

「星へ行くということは、星に命を分け与えるということだ」

手術の直前に、そんな言葉で最終確認をされた。

「きみはそれでいいのだね？」

シアさんが受けたのと同じ病院、同じ部屋で、スーツ姿の偉そうな男性が話しかけてくる。ぼくは口で返事をするのが嫌で、首だけで答えたけど、つまりそういうことなんだ。

エフノマルク素を酸素に変換する仕組みの核となっているのは、血液のかわりに入れられる赤い液体で。だからこそそれを地面に垂らせば、エフノマルク素をつくりだしている（と思われている）黒い物体を浄化できるらしい。それは直接大地の浄化に繋がるけど、その液体がなくなったらぼくたち自身も生きていけない。じゃあ液体を大量につくって空からまけばいいといっても、その液体は人の身体を通さないと完成しないらしく、しかも身体から離れるとすぐに効果が死んでしまうという厄介な性質を持っていた。

だから生きた人間が運ぶしかなかった。

そのために、多くの人が身を捧げた。

（そしてぼくも――）

一体身体をどんなふうにいじられるのだろうと、緊張しながら手術に臨んだぼく。だけど意外にも、覚悟したほど身を切り裂かれることもなく終わった。かかった時間だって、シアさんの半分以下だったように思う。――たんに自分がやっているときと待っているときの、感覚の違いかもしれないけど。

手術中も終わったあとも痛みはなく、すぐに立ちあがることができた。医学の進歩は本当にすごい。

感心しながらぼくが跳ねたり伸びたり腕を振ったりしていると、さっきの男性がやってきて「これを」とちいさめのウエストポーチを手渡してきた。咄嗟に手を出してそれを受け取ると。

「きみの命と同じ分だけ、種が入っている。それで余命をはかるといい」

一滴で一粒。

体内の液体だけじゃわからないけれど、これなら視覚的にも重さ的にも実感できる。

（これから、行くんだ）

そんな実感もわいた。

「ありがとう」

ぼくがそれを口にすると、男性は少し困ったように眉をさげて。

「どういたしまして」

ぼくの言葉に応えてくれたのは、ふたり目だった。

改めて頑張ろうと思った。

【2】

この星に降りてきてから、結構な時間が経ったように思う。けれど、暗い空は時間の経過なんて教えてくれないし、鳴かないおなかは何の役にも立たなかった。

ゆるやかな日常。

こうしてどこで立って伸びをしても、誰にも見られない。不躰な視線を浴びせられない。それだけでも、来たかいたがあったと思う。

「そもそも、どうして嫌われてたんだろう？」

地面に転がる黒い物体や骨をよけて歩きながら、ぼくは考えていた。

長いことそれがあたりまえだと思って生きてきた。でも嫌われるからには、必ずなにか理由があるはずなんだ。ぼく自身はこの赤い髪と眼のせいだと思っていたけど、本当は違うところに理由があるのかもしれない。

「シアさんに訊いてみればよかったかな」

どうしてぼくは嫌われるの？

――ぱり。

どうしてシアさんは、嫌わないの？

――ぱりぱり。

訊いたら答えてくれたらどうか。

――ぱりぱりぱり。

(ん?)

思考を邪魔するこの音は、足もとの黒い物体を踏みしめるときの音だ。だけどぼくはさっきから、それを踏まないようにして歩いていた。

(.....ってことは)

「誰かいるのっ!？」

咄嗟に叫んで、あたりを見まわす。

効率よく浄化作業を進めるために、『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』――『デザート・ドルフィン 砂漠のイルカ』はあえて離して投下される。つまり、生きているうちに他の人に逢えないというのは、そのあいだ移動できると予想される距離が、その間隔よりもはるかに短いからだった。

よって、こんなに早く誰かと逢えることなんて、本来ならばありえるはずがない。

(でもほら)

人は希望を捨てられない生きものだから。

ぼくは必死に探した。

自分以外に動くものを。

けれど、ぱりぱりという音は続いているのに見つからず、今度は自分の耳を疑う。

「もしかして、幻聴かな.....？」

手術のとき、耳も少しいじられていた。自分ではあまり違和感がなかったけど、それで調子が落ちていたのかもしれない。

確かめるように、両手で両耳に触れた。

そのときだった。

「うわあっ？」

足首に妙な感触を覚えて、思わずその場で地団太を踏む。

(へ、へび!?)

動物などは厳しいだろうけど、その手の生物や虫などは生存していてもおかしくはないと、ぼくは勝手に思っていた。突然変異で環境に適応した固体が誕生することは、そう珍しいことではなかったからだ。

自分でその物体がなんであるのか確認する余裕もなく、ぼくはそれを自分の足から振り払おうと必死だった。とにかく黒いそいつは、とりあえず人じゃないのだけは確かなようだった。

「は一な一れ一ろ〜〜〜っ」

その場をぐるぐると走りまわっていると、やがてぼくの足から離れたそれは、周りの黒と同化して見えなくなる。

(そうか……)

音がしているのに姿を見つけられなかったのは、完全に同化していたからか。

それなら――とぼくは、足をとめると急いで左手の小指をひねった。

(ここの地面を、浄化してしまえばいいんだ)

それからおびき出せば、黒の上よりも見えやすいはずだ。

相手はぼくが暴れたために警戒しているのか、黒のなかにひそんだまま動かない。

今のうちにと、小指の先からいつもの一滴。キャップをしめながら灰色を空へと見送って、ぼくはまた下を向いた。耳を澄ますけど、まだ動き出す気配はない。

「――来るなら、来てよ」

もちろん相手に言葉が通じるとは思っていなかったけど、コロニーにいた頃多くの言葉を呑みこんでいたぼくは、ここに来てから自由に喋られるのが嬉しくて。

ひとりごとを楽しんでいた。

それがひとりであることの、特権だった。

でも相手はそんなぼくの楽しみを奪うかのように、反応して動き出す。

(ほんとに来る！)

走る音から方向を予想したぼくは、足に噛みつかれる前に手を伸ばして捕まえた。

「えっ？」

意外にも、その感触はやわらかかった。手のなかで暴れるそいつを目の高さまで持ちあげて確認する。

黒い毛並みの――多分うさぎ、だ。

「どうして……」

生きている。

一体どうやって生きているんだろう？

人間と同じ哺乳類だ、そう簡単に適応できるとは思えない。

(――ああ、でも)

よく考えてみたら、へびとか虫は平気だろうっていうぼくの考えも、それらがしぶとそうだからっていう根拠にならない根拠しかないんだ。どんな生きものにだって突然変異はあるだろうし、こうして実際に生きている以上、否定するのもおかしい話で。

そのうさぎはよほどおなかが減っているのか、手のなかで暴れるから両手で抑えるので精一杯だった。

だけど、

「ごめん、ぼく、食べもの持ってないんだ」

口にしたとたん、おとなしくなる。

(わ、わかってる、の……?)

人にすら通じなかったぼくの言葉が、この星のうさぎには通じるというのか。なんて滑稽な話だろう。

おかしくて、笑い出してしまった。ゆるんだぼくの手から、ひょいと飛びおりたうさぎはぐるぐるとぼくの足もとをまわる。浄化した大地が気に入ったのか、その円からはみ出すことはなかった。

「あっ、そうだ。種を植えないと」

ウエストポーチに手を入れたぼくは、ふと動きをとめる。

(待てよ?)

大事なのは、この種と使った雫の数を合わせること。それさえ守られていれば、ぼくは自分の余命を正確に知ることができるはず。

それなら――

ぼくはひょいとしゃがんで、まだ走りまわっているうさぎのほうに右の手のひらを差し出した。するとうさぎは手が食べものだと勘違いしたのか、すぐに食いついてくる。

「いたたた。指じゃない、こっちこっち！」

ぼくが左手で手のひらの上に載せた種を指してやると、「ん？」というように一瞬動きをとめたうさぎが、今度はジャンプで手のひらの上に乗ってくる。

「おっと」

それでもちゃんと種は口のなかに入ったから。

「あまり噛まないで、呑みこんでやるんだよ」

通じるのかまだ半信半疑ではあるのだけど、アドバイスしてやったとたんに「ごくり」と聞こえた。

「ははっ、よくできました」

ぐりぐりと頭をなでてやる。

(種だけじゃ、腹の足しになんかならないけど)

ポットロボットが来てくれれば、この星の汚れた水を浄化してつくられたきれいな水を得られる。それだけでもきつと、このうさぎにとってはご馳走だろう。浄化した大地に種を植えられないのは残念なことだけど、この星に来てまで後悔するのは嫌だったから。

「……自分の思ったとおりに、生きるんだよ」

自分に言い聞かせるように、呟いた。ぼくと同じ赤い眼が、こちらを向いた。

「じゃあ、またね」

立ちあがってその場を離れると、すぐにぱりぱりという音がする。振り返らなくても簡単に予想がついた。うさぎがぼくを追おうとしているんだ。

「だめだよ、そこから動かないで！」

ぼくは少し戻ると、うさぎの首根っこを掴んで円の中心へと返す。

「お願いだから、ポットロボットが一回まわってくるまでは、ここにいてよ。種を植えなくても、きれいな水をもらえればこの円だってそのまま生き残る可能性はあるんだ」

長い台詞だったから、ゆっくりと口にした。今度はちゃんと、百パーセント理解してもらえろと思って。

案の定うさぎは「くうん」とちいさく鳴いて、その場にごろり寝転がった。もう動くつもりがないことを示しているんだろう。

(かわいいなあ)

こんなペットがそばにいたら、孤児院での暮らしも少しは楽しくなっていたんだろうか。

「言うことを聞いてくれてありがとう、よろしくね」

最後にもう一度頭をひとなでして、ぼくは歩き出す。少しでも広い範囲を浄化したいと願っているぼくは、あまり足を休めたくないんだ。

(別に)

あわよくばシアさんに逢えるかも……なんてことを考えて、頑張っているわけじゃない。今はむしろ、ふたりになるほうが怖い。

シアさんとの数年間の暮らしは本当に楽しかったけど、同時にぼくを臆病者に変えてしまった。楽しさの向こうに、経験してしまった喪失感が透けて見えて、ぼくを威嚇してくるんだ。

――ひとりでいよう。

ひとりで生きて死ぬために、ぼくはこの星にやってきた。

だからたとえ動物でも、ぼくの決心を揺るがすようなものとは、あまり長いこと一緒にいたくなかったんだ。

(本当は――)

自分でもちょっとびっくりするくらい、嬉しかったけど。

懐かれたことなんかなくて、ぼくの言うことを聞く存在なんて、この世にはないものだと思っていたから。

たとえそばにはいなくても、あのうさぎやシアさんと同じ星にいられるだけで、ぼくは十分な幸せを感じていた。

歩く足取りも、自然と軽くなる。

「他にも生きものがいるのかなあ」

そしてぼくの言葉を、聞いてくれるのかな。

ふたりは怖いと考えているくせに、出逢いを期待するぼくの心は――珍しく、裏切られない。

(……！)

しばらく歩いていると、またぱりぱりと黒い物体の上を渡る音が聞こえてきたんだ。方向からしてみても、さっきのうさぎではないだろう。若干足音も重い感じだ。

ぼくはまた足をとめて、注意深くあたりを見まわす。また黒い生きものだったら、姿を発見しにくいからだ。

――でも。

「あ……」

そんな気遣いが不要なほど、その黒い生きものの姿は、はっきりと目に飛びこんできた。若干どころか、うさぎに比べたらはるかに大きい。それでも足音がああ程度だったのは、走り慣れているからだだろう。

(チーター？ ヒョウ？)

ぼくには区別がつかない。けどぼくが危険であることだけは、確かだった。もしさっきのうさぎみたいに噛みつかれたら――

「い、いやだ……」

血のかわりに、ぼくの命が流れる。

流れてしまう。

ぼくはまだほんの少ししか、この星を助けていないのに。

(――まだ、生きていたいのに！)

「わあああああああああ」

叫びながら、ぼくは走り出していた。

あんな大きい生きものまでいるなんて、聞いてない。自分の意思でゆっくり死に逝くのは耐えられるけど、無理やり奪われるのは嫌だった。

(早すぎるっ)

まだ研究してないんだ。

どうやったらこの星が青く見えるのか。

どうしたら、緑の大地から青い空が生まれるのか。

ぼくはまだ――

「あ……っ!？」

あまりに急ぎすぎて、ちょっとした大地の隆起に足をとられてしまった。勢いがついていたため身体が浮かび上がり、豪快に前のほうへと転がる。

――悲劇は、それだけじゃなかった。

やっぱり運命はぼくを裏切るんだ。

「……………」

あまりの出来事に、声さえもでない。

身体を地面に横たえたままの、ぼくの視線の先にあるものはさっきの獣――ではなくて。ウエストポーチからこぼれ落ちた種。ぼくの命の残り火をはかるもの。それをこぼしてしまった。

(拾う？)

でもそんなことをしていたら、ほら足音は近づいてきてる。

(拾わない?)

でもそんなことをしたら、ぼくはぼくの命がわからなくなってしまう。

金縛りにでもあったかのように、ぼくはそこから動けなかった。かろうじて上半身を起こすことはできたものの、立ちあがる気力はない。

「……ははっ」

(どうせここで死んでしまうなら)

種の数なんて、関係ないのかな。

そんなことを考えた。

がちがちと鳴る奥歯をとめられない。

歪む視界を、戻せない。

なのに耳だけはどこまでも正常で、近づいてくる恐怖を教えてくれた。

「——シアさん——」

(ひとりで、よかった)

ふたりでいるときにこうなっても、ぼくはきっとシアさんを守りきれない。それに比べたら、ひとりでこっそりと死ぬほうがまだ。

そのまま目をつむって、まぶたの裏に大切な人の顔を思い描く。

(こんなこと言ったら)

シアさんはきっと怒るだろうけど。

「シアさんがぼくのお母さんだったらよかったのに」

ずっと胸のなかにしまっていた言葉を、口にした。

いいんだ。

(これが最期の、ひとりごとだから)

手を合わせて、シアさんの幸せを祈る。

獣の息づかいを、すぐ近くに感じながら。

(シアさんはこんな獣とじゃなくて)

素敵な人と出逢えますように——



——と、死を覚悟したぼくだったのに。

なぜかぼくはまた、こぼした種を見つめていた。というのも、獣がぼくそっちのけで種を食べているからだ。

(さ、最初からこっちが狙いだったの?)

種から特殊な匂いが出ているのかなんて、普通の鼻しか持っていないぼくにわかりはしないけど。

「困ったなあ……」

命は助かった。

でも、命をはかるための種はもう半分くらい失われてしまった。

種はポットロボットを呼ぶためにも必要なもので、数が足りないのは二重に困るのだ。

「……一緒に行くしか、ないか」

ポットロボットは、信号を発している種のもとに定期的に訪れる。今種をばりばり食べているこいつと一緒にいさえすれば、数が足りなくても問題はないんだ。埋めてしまえば動かさないけど、こいつは動けるから。

(残りの命は、もう自分で判断するしかないな)

いつ終えても後悔しないように、毎日を過ごそう。

改めて決心したぼくを励ますように、種を食べつくした獣がぼくに擦り寄ってくる。そういえば、まだ吠えるところを聞いていない。実はそう獰猛な獣ではないのかもしれない。

「き、きみも言葉がわかるのか？」

それでもやっぱり怖さはぬぐえなくて、応えるように伸ばしてやった手は震えていた。

獣は「くうん」と、うさぎと同じ鳴きかたをした。

「あは、そんな大きな身体で、かわいく鳴かないでよ」

思わず笑ってしまう。

(さっきのうさぎも、やっぱり連れていこうか)

ぼくなんかについてこようとしてくれた。それに、この獣がいればうさぎだって守れそうだ。

ただ問題は――

「ねえきみ、うさぎは食べないよね？」

ぼくに興味がないのなら、きっと肉食ではないだろう。

そう思って訊いてはみたものの、喋れない獣が相手では返事がわからない。

「ええと、きみがうさぎを食べないなら、ぼくと一緒に迎えに行ってもいいんだけど」

言い直すと、ひょいと立ちあがった獣は首を動かして自分の背中を見る仕草をする。

「……乗れってこと？」

どうやら正解のようだ。

――うさぎを食べないことも。

「ゆ、ゆっくり走ってよ？」

馬にも乗ったことがないぼくは、立ちあがってお尻についた灰色を払うと、おそろおそろの獣の背中にまたがる。

「待って！ どこを掴めばいい？」

全身を覆う黒い毛は、短すぎて掴めない。そもそもそんなもの、引っ張ったら痛いだろうと思うと無理だった。でも背中はずりとしていて、掴めるものはない。

(だけど掴まないと絶対落ちる！)

それには自信があったから、訊いたんだ。

すると頭の上の耳がふたつ、ぴくぴくと震えた。

「え……み、耳？」

掴むためには獣の背中にぼくの胸をべったりつけなければ無理だ。しかし実際にやってみると、意外にもそれでかなり安定することがわかった。

「――うん、大丈夫みたいだ。じゃああっち！」

指差して、ぼくがやってきた方向を告げる。

「ゆっくりだよっ」

振り落とされたくないから、念を押した。

(それにしても……)

星では歩くしか移動手段がないから、他の『^{デザート・ドルフィン}砂漠のイルカ』と出逢える確率はかなり低いという話だったけど、この獣がいたらそうでもないような気がした。もしかしたらお偉いさんたちは、そこまでこの星を把握していないのかもしれない。

そんなことを考えているあいだに、さっきの場所まで戻れてしまった。でもそこには、ぼくをもっと驚かせるための仕掛けが待っていたんだ。

ぼくが浄化した円のなかに、まだ寝転がっているうさぎ。

そしてその横には――女の子。

この星ではそう簡単に逢えないはずの、ぼく以外の人が横たわっていた。しかもその子の髪はぼくと同じ赤色をしていたんだ。コロニーにいたって、ひとりもそんな人いなかったのに。

乗っていた黒い獣から降りたぼくは、足音を立てないようにゆっくりとそこに近づいていった。見ると、女の子は完全に目をつむっているようで、ぼくにはまだ気づいていない。今のうちに観察しておこうと身体のほうへ視線を移したぼくは、その女の子が男物のTシャツ一枚しか着ていないことを知った。裾からはするりとしたちいさな脚が伸びていた。

とたんにぼぼぼと、顔が熱くなる。

(この子……十歳くらいかな？ きっとぼくよりちょっとちいさいくらいだ)

もしシアさん並みの体型でこんな格好をされていたらって考えたら、まだマシだと少し落ち着くことができた。

不意に、女の子の横で伸びていたうさぎが顔をあげ、ぼくに気づく。ぴくぴくと二回耳を揺らしてから、嬉しそうにぼくのほうに飛び跳ねてきた。

――と。

うさぎが動いたから気づいたのだろう、女の子もゆっくりとその目を開いた。

「あ……っ」

ぼくはもう一度、驚く。

その眼も、ぼくと同じ色をしていたから。

女の子のほうもかなり驚いた様子で上半身を起こすと、ぼくと目を合わせたまま十回も瞬きをした。ぱちくりぱちくり、なんて音が聞こえてきそうだった。それから魚みたいに口をぱくぱく動かして、だけど声は出していない。

「あの……？」

待ちきれずにぼくが声をかけると、今度は一転素早い動きでぼくに――抱きついてきた。

(えええ!?)

身体に隠れて見えなかった長い髪も、ぼくの身体に巻きついてくる。

「あなた、仲間ね！」

耳もとで嬉しそうな声が聞こえた。

「仲間？」

そう、もし髪と眼が赤い種族なんてものがあるのなら、仲間と呼べるのかもしれない。

女の子はぼくの両肩に手を置いたまま身体を離すと。

「あなたもこの星で生まれたんでしょ？」

「えー」

ぼくの予想をはるかに超える言葉を口にした。

(あなた、も?)

心臓がどくりと脈打つ。

「ぼくは違うけど、きみはこの星で生まれたの？」

シアさんが憧れていたように。

この星で出逢い結ばれた男女が、本当にいるというのか。

しかし女の子はぼくの否定のほうが気になったみたいで。

「なあんだ、違うんだ。『^{デザート・フィッシュ}砂漠の魚』は一度浄化した場所には戻らないっていうから、てっきり仲間だと思ったのに」

残念そうに眉を下げながら、ぼくから手を離した。その声が、あまりにもさみしそうだったから。

「――ぼくは『^{デザート・フィッシュ}砂漠の魚』じゃないよ」

「えっ? じゃあなに!？」

輝きを取り戻した笑顔に、尝试してみる。

「『^{デザート・ドルフィン}砂漠のイルカ』。イルカだ」

「イルカ? 魚とは違うの？」

(ああそうか)

この星で生まれたなら、イルカを知らなくても不思議じゃない。

「魚よりもっと、ロマンチックなものだよ」

「ロマンチック？」

「きっと、女の子が好きなもの」

「そっか」

女の子の目が、改めてぼくの顔を捉える。

それからこりと、笑った。

「じゃあわたしは、逢ってもいいのね」

口にすると、もう一度抱きついてくる。

「わーっ」

勢いで後ろに倒れてしまった。背中の下で聞こえたぱりぱりという音は、ぼくの『ひとり』が本当に崩れてしまった音かもしれなかった。

——それからぼくたちは、ふたりと二匹並んで歩きながら、いろいろな話をした。その場で話をするのはもったいないと思ったから。

ぼくと女の子・ミウが並んで歩き、その後ろを獣が歩いている。背中にうさぎを乗せて。
「あのね、『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚 』に姿を見られてはいけないって、言われてたの。嫌われちゃうからって」

「誰に？」

「お父さんとお母さんに」

「でも、そのお父さんとお母さんも、『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚 』なんだよね？」

「そうだけど、普通自分の子どもは嫌わないでしょ？ だから平気なんだって」

「……………」

すぐには答えられなかった。

(多分、そうなんだと思う)

だけど捨てられたぼくには、普通からかけ離れたぼくには、うなずく権利なんてないような気がして。

「……普通は、ね」

そんな答えしか返せなかった。

(でもおかげで、少しわかった)

ミウの両親は、ミウの髪と眼が蔑まれる原因だとわかっていたから、コロニーから来た人の目に触れさせてはいけないと思ったんだろう。星に来る前は大丈夫だと思っても、実際来てみるとゆっくり、でも確実に死んでゆく現実に耐えられない人がいるかもしれない。もしそんな人の前にミウが現れたら——あまり考えたくないことが、起こってしまう可能性があった。

「リムは、『^{デザート・ドルフィン} 砂漠のイルカ 』だから、逢っても平気なんだよね！」

無邪気に笑うミウは、『^{デザート・ドルフィン} 砂漠のイルカ 』というものが本当にあるものだと思ってしまったようだ。ぼくにとっては好都合なことだけだ。

「そうだよ。だからぼくはミウを嫌わない」

(嫌えるはずがない)

シアさんが現れるまでのあいだ、たったひとりで過ごしていたぼく。ミウだってきっとそうだろう。今ひとりであることから、両親はすでに亡くなってしまっていることが予想できるし、人を見かけても声をかけるなどと言われていたんだから。

「うれしい」

告げながら、ミウがぼくの左手に右手を絡めてくる。誰かと手を繋ぐなんて、一体どれぐらいぶりのことだろう。

ふと、ミウの体温がぼくと変わらないことに気づいた。

(最初から適応して生まれてきたのかな？)

人の子なら、普通酸素が必要な身体で生まれてくるはずなのだ。でも両親が『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚 』である以上、そのふたりの体内は当然変えられているだろうし、そんな状態で子どもを生めるということ自体が、ぼくにとっては信じがたい話なんだけど……

(どうせ出逢えないだろう)

シアさんを応援する傍らで、そんな冷めた気持ちもあって、ぼくはシアさんのそこまでは心配していなかった。でも、今こうして確かに生まれた命が目の前にある以上、心配せずにはられない。

「ねえリム。コロニーには、わたしたちみたいな髪の色の人はいっぱいいるの？」

「えー」

なにも知らないミウは、ぼくの心を平気でえぐってくる。ぼくは繋いだ手が震えないよう意識しながら。

「……うん、いっぱいいるよ」

嘘をついた。

この星から出られないミウには、絶対にばれない嘘。

「あっ、そうなんだ？ 見たかったな～。わたしね、この色結構気に入ってるんだよ。鮮やかで綺麗でしょ？ でも『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』の人たちはみんな、空や大地みたいに暗い色ばかりだったから」

本当は、コロニーの人々もみんなそうだ。

「——ミウがぼくを仲間だと思ったのって、髪色のせい？」

懺悔のかわりに、ぼくはぼく自身を追いつめる問いを投げた。

ミウが、あっさりとうなずく。

「うん、そう。『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』同士の子どもはそうなるんだって。なんかね、わたしにはよくわからないんだけど、身体に流れてる水を赤くするためにいろいろなものを混ぜてるから、その作用で赤くなっちゃうんだって」

「へえ……」

(じゃあ、ぼくは、やっぱり——)

無意識に、足をとめていた。

ぼくもミウと同じ、『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』の子どもなんだ。より人に近づけるためだけに、強められた赤を背負って生まれてきた。

(それに、そうだ)

考えてみれば、思い当たることはいくつかある。たとえば、みんながぼくを嫌っていたのだからぼくがどんな病気を持っているかわからないからだろうし、ここに来るための手術が簡単に終わってしまったのだから、ミウのようにぼくもこの環境に適応して生まれてきたからだろう。

「それにね」

ミウも足をとめ、くるり後ろを振り返る。

「黒い動物たちは、普通の『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』には懐かないみたいだよ」

つまり最初から懐かれていたぼくは、普通じゃなくって。この星ではなくコロニーにいたことも、どこまでも異常で。

だって『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』同士が出逢うことなんて、この星の上でしかありえないんだ。コロニー内では手術後嚴重に監理され、姿を見ることはできても交わることなど不可能だろう。かとい

って、ここで生まれていたらミウのように、星の外には絶対に出不来はず。この星は大気以外にも細菌やウイルスといった問題を抱えていて、コロニーにそれらを持ちこまないためにも、一度降りたら戻ってはいけないことになっていた。だからもし本当にぼくがそういう子どもなら、コロニーには帰れないんだ。

それなのに。

(どうしてぼくは、コロニーにいた?)

シアさんは、なにか知っていたんだろうか――?

どうしてぼくが立ちどまってしまったのか、わからないミウは期待するような目をぼくに向けた。

「ここで浄化するの？ わたしね、一度間近で見たいと思ってたんだあ」

ミウのほうが背がちいさいので、ほんの少し首をかしげて見あげる仕草がかわいい。

「――そっか、じゃあやるよ」

そういえば、話しながらずいぶん歩いてきた。前に浄化したポイントはとっくに見えなくなっているから、ちょうどいいだろう。

ぼくはいつものとおり左手小指の先をひねって、キャップをはずす。興味深そうな瞳を向けてくるミウが、くすぐったい。

「いくよ」

はずしおわったぼくは、慣れた手つきで左手を傾けた。

――そのときだった。

さっきまでおとなしく見守っていたうさぎが急に、獣の背中から飛びおりてぼくの足もとに飛びこんで来たんだ。

「あっ」

よけようと思ったけど、遅かった。一滴の水は黒いうさぎの上に落ち、その色を一瞬赤く染めたあと――

「わあ、すごい！」

大地に垂らしたときと同じように、うさぎの黒い色だけを連れてふわりと舞いあがる。

あとには、白いうさぎが残った。

それはぼくがコロニーで目にした姿と、変わりのないものだった。

「リムってうさぎまで浄化できちゃうんだ〜」

純白の毛並みを取り戻したうさぎを持ちあげて、嬉しそうにまわるミウ。

「ぼくもびっくりしてるよ……」

対するぼくはひどく戸惑っていた。まさか生きものまで浄化できるとは思っていなかったから。

「ねえねえ、そっちの猫も白くなるかな？」

「えっ？ これ猫なの!？」

「わかんないけど、お母さんは大きな猫がいるって言ってたから」

「……そっか」

正直ぼくにも区別がつかないんだ、いっそ大きな猫ってことにしておいてもいい気がしてきた。

(問題は、その大きさかなあ)

うさぎはちいさいから一滴でも大丈夫だったけど、この猫はうさぎの軽く五倍くらいはあるだろう。

「あとどれくらい残ってるの？」

ぼくの戸惑いに気づいたのか、ミウがぼくのウエストポーチをひっぱりなかを覗きこんだ。『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』はみんな同じものを支給されるから、その中身がどんな意味を持っているのかも、ちゃんとわかっているようだった。

「えーっ？ リムの種これだけしかないの!？」

「半分くらいこいつに食べられちゃったんだよ。だからもう、どれくらい生きられるのか把握するのは諦めてる」

猫を指しながら告げると、ミウはほっとした表情を浮かべた。……浮かべてくれた。

「じゃあまだいっぱいあるんだよね？」

「うん、ここに来てから、まだそんなに経ってないし」

ぼくがそう告げると、ミウは手のなかのうさぎを放り投げて、腕組みをした。うさぎは器用に着地すると、今度はぼくのほうに寄ってきてぼくの周りをくるくるとまわる。お礼でも言っているのだろうか。

「だからって無駄使いはさせられないし……」

リムはそう呟いたあと、名案が浮かんだようでぼんと両手を叩いた。

「そうだ！ わたしがやればいいんだっ」

「……えっ？ できるの!？」

聞いた瞬間、とんでもない案だと思った。でもよく考えてみると、今こうしてこの星でミウが生きている以上、ミウの体内にエフノマルク素を変換する仕組み——つまり、ぼくと同じ体液が流れているのは明白で。

「だって、お母さんやお父さんと同じ血が流れてるんでしょ？」

ミウの言うことは正しかった。

でも賛成は、できなかった。

「だけどミウ、きみにはぼくの指みたいにキャップがないから、傷をつけたところからどんどん命が流れてしまう危険があるよ」

流れがとまらないということは、そのまま死に直結する問題になってしまう。それはぼくがこの猫に襲われると勘違いしたときにも、考えたことだった。普通の人に流れる血には、傷ついたところ治す機能が備わっているけど、ぼくたちのなかにある液体のその機能はかなり弱い。その分浄化するための力を強化されているからだ。

これは命にかかわる大切なことで、ミウだって両親から聞いているはずなのに。

「傷口をリムがなめてくれればいいんだよ。そしたら無駄にならないでしょ？」

屈託のない笑顔をぼくに向けてくる。

「ミウ……」

「ねえリム、よかったらさ、大地の浄化もかわりばんこにやろうよ」

「だめだ、そんなの！」

黙っていればミウは、寿命まで生きられる。『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』の子どもの寿命がどれくらいなのかはわからないけど、少しずつ失っていくよりも失わないほうが長く生きられるはずだ。ミウ

にはぼくと違って、大地を浄化する義務などないんだから。

しかしミウはぼくが賛成しなかったことが不満なのか、怒り出してしまった。

「どうしてっ？ わたし、せっかく逢えたリムに早く死んでほしくないよ！ かわりばんこにやったらきつと、わたしと同じくらい長く生きられるのにっ！」

「……………それでも、だめだ」

「もういい！ 行こっ、猫」

ミウは本当に猫を浄化するつもりなんだろうか、ぼくに背を向けて歩き出す。

(追って、謝ればいい)

そうしたらきつと、ミウは許してくれる。

シアさん以外の人とつきあいのなかったぼくでも、それくらいのことはわかる。

——だけど、できなかった。

そのあとを思い描いても、結局同じ結末しか浮かばなかったから。

「だめだよ、ミウ……」

もう一度、呟く。

早く死んでほしくない、言ってもらえるのは嬉しい。もうひとりにはなりたくないという気持ちも、痛いほど理解できる。けどそのために、ミウの命を吸い取るわけにはいかないんだ。

(そんなのは、嬉しくない)

全然ロマンチックじゃないよ。

——ぼくは、大丈夫だから。

そもそもひとりで生きるために来たんだ。

ひとりで死ぬために来たんだ。

なのに、どうして、濡れるんだろう？

ここには涙を乾かす日差しも風もない。

ぼくを取り囲むのは、惨めさだけだ。

「——！」

足もとを見ると、いつの間にか周ることをやめていたうさぎが、慰めるような目でぼくを見あげていた。

ぼくはそんなうさぎにひとつ苦笑を送って、今度こそ大地に、ぼくの命をわけあたえる。うさぎがそばにいてくれるのなら、種を先に使ってしまうおうと、ひとつ植えた。

淡々とした作業だ。だからこそ遠くからそれを見るだけだったミウは、それがとても簡単なことのように思えたのかもしれない。

「……行こうか」

(ぼくたちも)

作業が終わるとぼくは、さっきミウがしていたようにひょいとうさぎを抱えあげ、ミウが向かったのとは別の方向に歩き出す。

(もう、逢えないかもしれない)

でもミウを犠牲にせずすむなら、それでもいいと思った。この星で生まれたその事実だけで

、ミウは普通の人とは違う大きなものを抱えているんだから――。



しばらく歩いていると、聞き慣れない音が耳に届いた。

「なんだろう？」

ごーごーと、地響きのように聞こえている。だけど地面が揺れているわけではない。あたりは相変わらず黒い物体が敷きつめられた景色で――いや、視界の端になにかあるようだ。

「お」

不意にぴょんと、ぼくの腕のなかからうさぎが飛び出す。色が白くなったおかげで、黒い地面の上にもちゃんと見えるようになったのありがたい。体内にもなにか変化があるのだろうか？ 浄化されたことによってこの環境に適応できなくなったら困ると思っていたけど、そんな心配はいらないようだった。

懸命にジャンプをくり返し進んでいくうさぎを追って、音のするほうへと歩いていく。

――ぴょんぴょん、ぱりぱり。

――ぴょんぴょん、ぱりぱり。

そうしてたどり着いたぼくの視界にあったのは、動く床だった。その正式名称を思い出すまでに、うさぎのジャンプ十回分くらいかかった。

(河――なのかな？)

黒い水がもっさりとした速度で流れている。ぼくがすぐに河だと気づけなかったのは、その水がただ黒いだけではなく、とろみをつけすぎたスープみたいになっていたからだ。だから河とは思えない音を出しているし、流れが妙に遅いのもきっとそのせい。

「こら、そんな水飲むんじゃない」

近づこうとしたうさぎをとめて、歩み寄る。

(汚水ってレベルをはるかに超えてるなあ)

一体なにをどう混ぜたらこんな水になるのだろうか。ぼくが知っているすべての色を混ぜたって、これほど複雑な色合いはつくれないと思う。これを浄化して飲めるレベルの水にまでするポットロボットは、ぼくなんかよりもはるかに優秀であるような気がした。

(ぼくの命をここに垂らしたら、どうなるかな)

この水の量じゃ、すぐ混ざりこんでしまいそうだけど……それ以前に、ぼく以外にもそれを考えた人は当然いるはずで。河の状況がなにひとつ変わっていないことを考えれば、結果は明らかだった。

ここまでくると、もうなにが悪いのかわからない。

空が悪いのか、大地が悪いのか、水が悪いのか――

「はじまりが人であることだけは、確かなのにね」

呟きながらぼくは、岸にしゃがんで手を差し入れてみた。とろりとしたなまあたたかい感触がぼくの肌をなめる。

(—ん?)

そうしているあいだに、ぼくの耳はまた聞き慣れない音を捉えた。河の流れる音の隙間を縫って、ぱらぱらと軽快に鳴っているんだ。

「プロペラ……ポットロボットだ！」

実はぼくはまだ、その姿を見たことがなかった。そういうロボットがいるということは説明を受けて知っていたけど、いつもはポットロボットが来る前にその場を離れていたから。

河上のほうから徐々に近づいてくるポットロボットは、ちいさなヘリコプターのような形をしていた。ただ、身体のサイズに対してプロペラがちいさいのか、身体をふらふらと揺らしながら進んでいる。

それはやがてうさぎの真上までやってくると、身体の下のほうからシャワー口のようなものを出し、うさぎに向かって水をかけはじめた。

きれいな水を。

うさぎはそれを飲もうと、大きく口を開いたまま上を向こうとしていた。けれど人と違ってはっきりとした首があるわけじゃないから、うまくできないようだった。

「そういうときは、ぼくに頼ってくれればいいんだって」

手を伸ばして、ぼくはうさぎの身体をひょいと持ちあげた。ポットロボットもこっちに移動してくる。手のなかでうさぎを引っくり返して、楽に口が上を向くようにしてやった。

当然ながらうさぎの口だけじゃなくて、全身やぼくの手にも水がかかるんだけど、それが気持ちよくて仕方ない。思わず、ぼくもひとつ種を呑んじゃおうかと思ったくらいだ。

しばらくそうしてうさぎに水を与えたポットロボットは、役目を終わると汚れた水を補給して、またどこかへと飛んでいった。これを待っている大地はくさるほどたくさんある。命を与えにやってくるぼくたちがいる限り、増えつづける。ぼくたちはいわば戦友なんだ。

そう考えたら、自然と口が動いた。

「またね〜！」

返事などないことはわかっているけど、それに慣れているぼくにとってはたいした問題じゃなかった。

—それよりも。

(そういえば、ミウにはなんにも言えなかったな)

そのことを思い出して、哀しくなる。

ポットロボットが消えるまで見送ってから、ぼくはもう一度河のほうを見やった。

「河に流せたらいいのに……」

こうして別れてしまった事実を。せめて最後に、手を振る余裕さえあれば。きっとこんなにもやもやした気持ちにはならなかっただろう。

「あいさつは魔法さ！ とってもロマンチックなものなんだ」

言っていたシアさんを思い出す。

(確かにそうなんだ)

「さよなら」を告げたら、もう二度と逢えないような気がしてしまう。「またね」と笑ったら

、次に逢ったときなんの話をしようかと考えられる。「おはよう」がなければ一日が始まらないように、なにもない別れはなにも生まない。

「ごめん」がなければ、先へは進めない。

「――戻ってみようか」

うさぎの背中をなでながら口にすると、うさぎは賛成するように耳を動かした。

そのとき。

ぼくは黒い河のなかに、一点だけ違う色が混じっていることに気づいた。

(あれ?)

もう少し水のほうへと近づいて、流れてくるそれがなんであるのか確認しようとする。さいわい流れは遅いので、じっくりと見ることができた。

くすんだ緑色。そう大きくもないサイズ。

「あっ」

それがなにか確信が持てたのは、ぼく自身も身につけているものだからだ。

(『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』のウエストポーチ!)

思わず右の腰に手をやる。

死にゆく瞬間に、誰かが捨てたのだろうか。ウエストポーチは簡単に落ちたりしないように、かなり頑丈なつくりになっているんだ。自分の意思ではずさなければはずれないし、そもそもこれをはずそうとするときは、種が全部なくなったとき――つまり寿命が尽きるときしかない。

じっくりと、心臓が痛む。

(ぼくは死ぬために、ここに来たんだ)

そんなかっこいいことを言ってみても、こうして死の証しを前にすると動けなくなる。それはあの大きな猫に襲われそうになったときも、感じた恐怖。

「ぼくも、いつか……」

これを捨てなければならないときが来る。

そしてすでに半分の種を失っている以上、その正確な時期をはかることはできない。いずれは毎回のよう、この恐怖と戦わなければならないんだ。

ぼくに現実を突きつけた緑色が、ゆっくりと横切ってゆく。

目が離せなかった。

これを流した人はきっと、この気持ちと覚悟を教えたかったんだろう。だから、離してはいけない気がした。

(どうか安らかに、眠ってください)

心のなかで祈る。

ぼくが少しでも、あなたのあとを継げますように。

ポットロボットと同じように、最後まで見送ってから向きを変えた。

――いや、変えようとしたんだ。でも視界の端にまた映るものがあったから、ぼくは動きをとめた。

(今度は赤いものだ！)

河の水がこんなふうなせい、重さのあるものでなければ沈むことはないらしい。次に流れてきた赤いものも、目を凝らしてみると布のようだったから軽いのだろう。この河がどこから続いているのかはわからないけど、大地の上に置いておくよりも河に流してしまったほうが、他の『デザート・フィッシュ砂漠の魚』が見つめてくれる可能性は高い。そしてそれは、この星で頑張っているのは自分だけじゃないんだという、連帯感に繋がる一歩のかもしれない。

まだ行かないのかというふうに、ぼくの手のなかで身動きするうさぎをおろして、ぼくは河を見つづけていた。

流れてきたものが赤じゃなかったら、きっとそのまま行っていただろう。気になったのは、黒い水に浮かぶ赤が、灰色の大地にしみこんでゆく赤い一滴と重なったからだ。

少しずつ近づいてくるその赤いものは、さっきのウエストポーチと違って、ぼくとあまり馴染みのないものようだった。すぐにそれがなんであるのかピンとこなかったから。

(でも、どこかで見たことあるような……)

そしてそれが目の前を通りすぎたとき、ぼくは思い出す。

「あっ!？」

思い出して――河へ飛びこんだ。

(どうして……っ)

なんでこんなものが流れてくるんだろう。

考えられる答えはあまり嬉しいものではなかったけど、ぼくは必死だった。どうしてもそれを手に入れたかった。自分が泳げるかどうかなんて、泳いだことがないからわからなかった。でもそんなこと、どうでもよかったんだ。

ただ、近くに行きたかった。

ただ、存在を感じたかった。

(あれは、シアさんの――)

だけど淀みすぎた水は重く、それよりも重いぼくはどんどんと沈んでゆく。それでも手足を必死に動かして少しずつ進んだ。ぼくの人生を支配しつづけた、あの赤を掴むために。

「もう、少し……っ」

こうしているあいだにも、それは流されている。でも流れが遅いのは、やっぱりさいわいだった。ほどなくしてそれにたどり着くと、予想どおりだったとんでもない品物に苦笑しながら、絶対に放さないよう握りしめた。

瞬間、底のほうで水に足をとられる。

「うあっ」

顔が水面の下までもぐりこんでしまい、慌てて水を掻き分ける。口を汚染する黒い水はあまりにも不味く、ひどい吐き気に襲われた。でも今は、吐いている場合じゃない。

なんとか息のできる位置まで顔をもっていくものの、一度崩れてしまった体勢は簡単に直せるものではなかった。ゆるやかな流れも、今は凶器となってぼくを襲ってくる。

(とにかく岸のほうに……っ)

流れに逆らって進むのは無理だったから、横に進もうと手足を動かした。でも片手が掴んだものでふさがっている分、来たときのようにうまくはいかない。

やがて疲れが、ぼくの身体を蝕んでゆく。

(ああ――)

ぼくはこの星に来てから何度目かの、死を覚悟した。

このままどこかへ流れて、ぼくは死んでしまうのか。

流れてきたウエストポーチみたいに、ぼくの死体は誰かに恐怖を与えるだろうか。

「――っシアさん！」

もう後悔したくないから、さよならの言葉を言おうと思った。

けれどそれさえも、叶わない。

身体が重い。

沈んでゆく。

(だけど……放したくない)

ぼくはもがくのを諦めて、両手で赤を抱きしめた。

(そうだ、ぼく自身が赤なんだ)

ぼくの命はすべて河に溶け、必ずこの黒を浄化する。黒い色は空へと舞いあがって……ごめん、もっと空が黒くなったらぼくのせいだ。

(そしたら笑って?)

指差して笑ってよ。

ついでに手なんか振ってくれたら、ぼくはきっと応えるから――。

泣き声は嫌いだった。

ぼくが泣いていたって誰も寄ってこないのに、他の子どもは抱きしめられる。ぼくがいかに他の子どもと違うのかを見せつけられるようで、嫌だった。

だからあまり泣かなかった。

シアさんの前でも、あまり泣けなかった。

――それでも、シアさんはぼくを抱きしめてくれた。

「なんでぎゅってするの？」

って訊いたら、

「あんたが泣くのを我慢してるのが、偉いからさ」

笑いながらそう答えた。

それから。

「でも泣いていいときだって、あるんだからな？」

「どんなとき？」

シアさんは少し困ったように眉をさげ。

「誰かに自分が哀しんでいることを、伝えたいときかな」

だからぼくは、シアさんと別れるとき泣けたんだ。シアさんにぼくが哀しんでいることを、伝えなかったから。ぼくが誰よりもシアさんを好きだってことを、伝えなかったから。

(――じゃあ今)

ぼくに抱きついて泣いているこのミウを、ぼくはどうすればいいんだろう？

「……っく、……っ」

「ミウ……？」

そう、またしても、ぼくは死ななかった。

どうやらぼくたちを追ってきていたらしいミウと猫に、助けられたようだ。ミウだけならとても無理だったろうけど、身体が大きくて明らかに猫じゃない猫がいたから、ぼくは死なずにすんだんだ。

だけど身体中の疲労が激しくて、呑みこんでしまった黒い水の影響もあってか、ぼくはまだうまく身体を動かすことができなかった。ミウに支えられたまま、口を動かすのが精一杯。

「ありがとう……ミウ」

ぼくはすぐにミウを追いかけることができなかった。わかってもらえないなら仕方ないって、それがミウのためなんだからって、勝手に諦めていた。でもミウは、ぼくと話そうと追いかけていてくれたんだ。そうじゃなかったら、あの場面に間に合うはずがない。

「っ……リム、あのね……？」

触れ合う肌の体温は同じ。だけどあたたかいミウの涙が、ぼくにミウの心を教えてくれる。

「わたし、もう自分の、血を使うなんて、言わない、から……」

途切れ途切れの言葉のあと、ひっくと息を吸い。

「一緒に、いさせて……？」

「っ……」

(どうして——)

それが耳に届いた瞬間、ぼくの瞳からも水があふれた。

哀しくなんて、ないのに。

水はあふれてとまらない。

「——うん——」

他の言葉が思い浮かばなくて、それだけ口にした。ミウが泣きながら笑ったから、それでいいんだと思った。

(ああ、そうか)

嬉しいときも、泣けるんだ。

ミウはきっと、ぼくが助かったのが嬉しくって、泣いているんだ。

——今ならそれを、信じられる。

ぼくも嬉しいもの。

生きていることが。

ミウがそばにいてくれることが。

シアさんと同じ場所にいることが。

この星を、助けられることが。

(嬉しいから、涙が出るんだ)

ぼくとミウは、しばらくそうやって泣いていた。周りに猫とうさぎもやってきて、ぼくに身体を摺り寄せてくる。

——と。

うさぎはぼくの右手のなかのあれが気になるようで、ぐいと口で赤いそれを引っ張った。

「なあに？ それ」

やっと落ち着いたミウが、そっとぼくの手からはずしてくれる。あまりに握りしめすぎたのか、ぼく自身ではうまく開けなかったんだ。

そしてミウがそれをぼくの目の前に広げたから、とたんにぼくの顔はそれと同じ色になった。

(シアさんの、ぶ、ぶ、ぶら……)

だめだ、頭のなかでも最後まで口にできない。

シアさんのことだ、きっと窮屈だったから脱いで捨てたんだろう。人に出逢う確率はほとんどないことがわかっているんだ、もしかしたら全裸で歩いている……なんてこともあるかもしれない。これを偶然見つけたぼくは運がいいと言うべきか。たんにあんな河に飛びこむ命知らずがないだけかもしれないけど。

「なんなの？」

小首を傾げてかわいく訊いてくるミウは、本当にわからないようだった。今ミウが着ているTシャツも男物だし、きっとお母さんの衣服には手を出さなかったんだろう。

「——ミウが大人になったら、使うかもしれないものだよ。だから、ミウが持っているといい」

ごまかして答えると、それでもミウは無邪気に喜んでくれる。

「くれるの!? ありがとう」

それからすいとぼくの腰に視線を移して。

「じゃありム、そのポーチ貸してくれない? それに入れておくから」

「ああ……」

種のことをすっかり忘れていた。ぼくも見るとポーチのふたは開いていて、当然種なんて残っていきそうになかった。

「いいよ」

(ぼくにはもう、必要ない)

種に頼らず生きていこう。

だって普通に生きていたら、いつ死ぬかわからないのなんてあたりまえなんだ。

ぼくたちは種を手にするこゝとで、楽をしようとしていたのかもしれない。

楽に死のうと、していたのかもしれない。

(星を救いに来たくせに)

死ぬことばかり考えていたんじゃ、星にとっても迷惑な話だろう。

「楽しく生きる方法を、考えよう?」

そんな言葉を選びながら、ぼくはウエストポーチをミウに渡した。

(シアさんのこれだって)

きっとぼくにそのことを伝えにきたんだ。

シアさんはいつも楽しそうだった。

そんなシアさんを見ていると、ぼくも楽しかった。

ミウとも、そういう関係になればいい。

ミウは相変わらず不思議そうな顔をしながらも、「ありがとう」と受け取った。そしてウエストポーチに顔を突っこむようにしてなかを確認し――

「あれ? 底になにかくつついてるよ?」

再びあげたミウの顔には、種がひとつくつついていた。

「なにかって? 残ってる種じゃないの?」

「うん」

今度は手を突っこんで、ぐいっと引っ張る仕草をする。そうして取り出されたものは、白い紙。黒い水にぬれた割には変色したりしていなかったから、きっと耐水性の紙なんだろう。

「はい」

ミウは中身を確認せずにぼくに渡した。もしかしたら、ミウは字が読めないのかもしれない。

「なんだろう?」

普通の『デザート・フィッシュ砂漠の魚』なら、この手紙に気づくのは死の間際のはず。死にゆくための心得でも書いてあるのだろうか。

深く考えずに開いたぼくは、そこに並んでいた見覚えのある文字に――耐えられなかった。

「どうしたの、リム……どこか痛いの?」

どんどん文字が滲んできて、ちゃんと読むことができない。何度も何度も涙をぬぐって、少しずつ読み進める。

「リム？」

ミウの問いに答える余裕もなかった。

だってそこに書いてあったのは、シアさんが星を目指した本当の理由。

いかにぼくを大切に想ってくれていたのか。

いかにぼくを――

「わかった！ 嬉しいのね？」

ミウが言い当てた瞬間、拭いきれない想いがあふれた。

(――うん、わかったよシアさん)

ぼくはミウと生きる。

空を見あげながら、楽しく生きるよ。

ミウはシアさんの子じゃないけど、それくらいいい子だから。

それで一緒に、シアさんの子を捜すんだ。

――シアさんを、捜すんだ。

だからそれまでは――

またね。



ハロー、リム。

あんたがあたしを追ってくることは簡単に予想できるから、前もってこの手紙を残しておくよ。管理局の人にはちゃんと言っておいたから、届いているはずだよな？

読んでいるのはきっと死ぬ前だろう？ あんたには幸せに死んでほしいから、この手紙には本当のことだけを書く。自動的に燃えたりはしないから、読んだあとはちゃんと処分するように！なんてな。

あんたのその赤い髪と眼はさ、あんたの父親が『デザート・ドルフィン砂漠のイルカ』だったせいなんだ。ただ、本来なら母親もそうじゃないと赤くはならないはずなのに、あんたはなぜかその色を持って生まれてきた。だからみんな、あんたが星生まれだなんて誤解してさ。悪い病気でも持ってるんじゃないかって思いこんで、嫌って弾いていたというワケ。あんたにはなんの落ち度もないのにな。

現に、何年もそばにいたあたしは平気だった。みんなそのことに気づいていて、知らない振りをしていたのさ。本物のクズだ！

あたしはそんなクズどものなかに、あんたを残していくのは嫌だった。だから星行きを決意した。

.....実はな、あたしは生まれつき血液の病気を抱えていて、いつ死ぬかわからないって言われてたんだ。だから毎日楽しく生きようと思ってたし、そのためにあんたと暮らした。実際、ひと

りでいたときよりも楽しかったよ。楽しかったから、いつかおいていってしまうあんたのことが
気がかりだった。

医者に「もう持たない」って宣告されてからは、本気で考えたよ。

あんなのために、あたしはなにを残せるんだろう？ って。

そうして思い浮かんだのが、『子ども』だった。あんなは笑うかもしれないけど、あたしは本
気であんなの仲間を生みたいと、思ったんだよ。

星へ降りるためには、大掛かりな手術を受けなきゃならない。その過程で、あたしの病んだ血
液もすべて取り替えられる。実に一石二鳥な話さ。いや、ロマンチックな乙女心も満たされる
から、三鳥か!?

.....あたしだってね、本気で絶対に誰かと出逢えるとか、思ってたワケじゃない。本気で一生
に一度の恋ができるなんて、甘い気持ちでここに来たんじゃない。

ただ、あんなのために、なにかしたかった。

あんなを幸せにしてやりたかった。

あんながこんなに大切な存在なるなんて、自分でもびっくりだよ。

あんなもこの星にきて、それはあんなの寿命を縮めることになるかもしれないけど、ごめんな
、あたしはこれしか選べなかったんだ。今はあんなが後悔してないことを、祈るだけだよ。

――ああ、そろそろ行く時間だ。

じゃあな、リム。

あんなが幸せに生きることができてたらいいな。

あたしがリムという『聖なる御遣い』に出逢えたように、あんなも誰かと出逢えてたらいいな

。

願わくは、あたしの子とね！

ひとりよりふたりのほうが、絶対楽しいよ。

あんなと出逢うまでは、あたしだってもうひとりでいいやって思ってたけど、甘かったな。

できることならずと、あんなと暮らしたかった。

できることなら、そばで死にたかったよ。

でもあたしには、自分の気持ちよりあんなの未来のほうが大事に思えたんだ。

勝手でごめんな？

押しかけお母さんで、ごめんな？

別れのとて、泣いてくれて嬉しかった。「ひとりでも大丈夫」って、本当は自分に言い聞かせ
たかったんだ。

愛してるよ、リム。

あんながこの地球で、幸せに生きて幸せに死ぬることを、誰よりも願ってる。

離れ離れになっても、変わらない。空にあいさつをくれたら、あたしはいつでも同じ言葉を返
すよ。

忘れないで？

それじゃあ――

またな。

ちいさなカゴのなかで眠る、私の大切な『荷物』を、白い布で丁寧にくるんでやる。それから、あらかじめ用意しておいたちょうどいい大きさの鞆にそれを詰めて、私はひとつ深い息を吐いた。

(今日こそ、置いてこよう)

この荷物を、しかるべき場所に。

もう何度目かの決心をして、立ちあがる。

――毎日毎日、くるんではほどいてをくり返していた。

いつまでも終わらない夢を見ているように。

今自分の目の前にあるものは、なにかの間違いじゃないかと期待しながら。

けれどそれは結局、つらい現実を確認する作業にしかならなくて。

あの人がいつ、痺れを切らすかもわからなくて。

(取りあげられるのだけは、嫌なの)

これまでたくさんのことを我慢してきたけれど、それだけは無理だった。

私はこの荷物を守りたい。

だからこそ置きに――捨てに、行くのだ。

手に力をこめて、日々ゆっくりと重くなってゆく荷物を鞆ごと持ちあげる。

(この重さを忘れたくない)

そう強く願いつつ、ドアへと向かって一步一步踏みしめるように歩いた。なるべく鞆を揺らさないよう気をつけながら。

涙が落ちないように、気をつけながら。

(本当は――離れたくなんか、ない)

ずっとそばにおいておきたい。

二度と逢えない彼のかわりに。

彼は確かにここにいたのだと、証明してほしい。

けれどそれ以上に――

「……来られた……」

頬を濡らさずドアまで、初めて到達できた私はちいさく呟いた。

(やっと心が固まったみたい)

今日を逃したら、私は二度と手放せないかもしれない。

奪われてしまうかもしれない。

そう考えたとたんにもたあふれそうになる涙を、今度は握りしめたこぶしで我慢する。

(――さあ、行こう?)

今は泣くときじゃない。

私はこの手で、捨てなくてはならないのだ。

それがどんなにつらいことでも。

荷物の明日を想うなら。

荷物を生かしたいなら。

私は手放さなければならなかった。

やさしいぬくもりの、赤い荷物。

私と彼の愛の結晶。

コロニー^{ここ}で生まれてはならなかった一一命。

私の日課は、亡くなった母が大切にしていた庭を、自分の部屋から眺めることだった。

でも最近、庭そのものよりも眺めがいのある存在がそこにいる。

「ねえ、そんなにずっと世話をしていて、あなた飽きないの？」

身体中に緑の葉っぱをくっつけて、ホースから噴き出す水に濡れながらも、庭いじりをやめないその存在——カイに、窓から声をかけてみる。一日の半分以上をそこで過ごすカイは、いつ見ても楽しそうに植物と戯れているのだ。

(まるで病気よね)

先代のおじいさん庭師も真面目な人だったけれど、その紹介でやってきた私よりも若いカイは、それ以上に真面目で熱心な庭師だった。

そんな、半分呆れたような私の感情に気づくはずもないカイは、屈めていた腰をひょいともとに戻すと、

「飽きないですよ。植物だって人間と一緒に、毎日違った顔を見せてくれますから」

太陽みたいに明るい笑顔をこちらに向けてくる。これじゃあ植物たちだって喜ぶはずだ。

(空に浮かんでる偽ものの太陽なんかより、ずっと明るいものね)

植物の違った顔なんて私にはわからないけれど、太陽に応じて背伸びをしたくなる気持ちはなんとなくわかった。

こっそりと苦笑した私に、今度はカイのほうから声をかけてくる。

「お嬢さんこそ、毎日僕の作業を見ていて飽きないんですか？」

「あら、別にあなたの作業を見ているのではないわ。母が遺したこの庭を見守るのが、私の役目なのよ」

もちろんその役目は私が勝手に決めたものだ。でも、父だって私の部屋を庭に面した場所にあつらえた以上、それを期待していたのだろうと思う。

「あ、そ、そうですよね……失礼しましたっ」

私の答えに、カイはなぜか慌てて頭をさげると、また作業に戻ってしまった。そのおどおどした仕草が、今までの庭にはなかったものだから、やっぱり楽しい。

「そんなにかしこまらなくていいのよ。あなたのおかげで、庭を眺めるのが楽しくなったのは事実だから」

窓枠に頬杖をついて、こらえきれなかった笑いを浮かべながら言ってみたら、カイはまた大振りに顔をあげ、

「ほんとですか!? それなら嬉しいです！」

「きゃっ」

ホースまでこちらに向けたから、危うく水が部屋のなかまで入りそうになった。

「あ、すみませんっ」

カイはその場にホースを投げ出すと、首からさげていたタオルを手にしてこちらに走ってくる。そしてそれを私に渡そうとしたのだけど、ところどころに土がついているのが目に入ったのか

、すぐに身体の後ろに隠した。

「こっ、こんな汚いタオルで拭くなんて失礼ですよ！ ハンカチ、持っていないくてすみません……」

窓から一歩離れたところで、恥ずかしそうに下を向く。

(ほんと、まるでおっちょこちょいな弟ができたみたいだわ)

きょうだいのいない私には、その反応がやっぱりかわいく見えて。落ちこんでいるカイを前にまた口をおさえてしまう。

「ど、どうして笑うんですっ!?!」

雇い主の娘である私の言動が気になるのだろう、カイはさらに、頭から湯気が出そうなほどまっ赤になって叫んだ。

だから私も慌てて違う種類の笑みを浮かべながら。

「あなたがあんまり素直な反応をするものだから、ついね。水なら入ってこなかったもの、大丈夫よ。窓のふちに当たったから、飛沫が少しかかっただけ」

気分を害したわけではないことをアピールする。

「でも、濡れたのは濡れたんですよ!? ちょ、ちょっと待っていてくださいっ、きれいなタオルを取ってきますから！」

本当は、タオルくらい当然私の部屋にだってあるのだ。それでもカイは自分が濡らしてしまったからと、責任を感じて自分で用意しようとしているのだろう。

それがわかったから私は、まわれ右をして走り出したカイの背中を呼びとめた。

「待ってカイ！ 私、そのタオルでいいわよ？」

さきほどカイが身体の後ろに隠し、今は丸見えなそのタオルを指差してやる。

目を丸くして振り返ったカイは、まるで白旗を振るように顔の前で激しくそのタオルを振った

。

「とんでもないですよ！ こ、こんな汚いタオルで拭いたら、逆にお嬢さんが汚れてしまいますっ」

「汚れていないところだってあるでしょ？」

「ば、僕の汗まみれです！」

「いいからよこしなさいよ」

「嫌ですっ」

「じゃあここにきて」

「い——」

「嫌なの？」

「……っ」

窓のすぐ下を示したら、反射的に答えようとしていたカイは口を噤む。

「嫌、なの？」

確認するようにもう一度訊いたら、今度はタオルではなく首を振った。

横に。

もう一度、カイが近づいてくる。

今度は一歩も隔てない、すぐ近くまで。

手の届く、距離まで。

「――あっ」

どこか緊張した様子のカイの隙をつき、私はその手からタオルを奪い取った。

「じゃあ借りるわね」

「お、お嬢さん〜っ」

「大丈夫だって。ほら、ちゃんときれいなところもあるじゃない」

広げて白い部分を探すと、少しだけ濡れていた手や袖口を拭いた。

「――！」

拭いていると、そのタオルから微かに香るにおいに気づく。

(ああ、これ、お母さまのにおいだ)

庭が大好きだったという母は、暇さえあればいつも庭にいたらしい。そしてその手で私を抱いていたから、母の身体に染みついた緑や土のにおいが、私にまで届いていたのだろう。

「お、お嬢さん？ どうしました？ タオルになにか――」

思わずそれを凝視して動けなくなった私に、心配そうな声をかけてくれるカイ。

母のように、庭で自由に生きていける彼。

(羨ましいな)

顔を見返して、そう思った。

羨ましい。

私は庭に出ることを、父に禁止されていた。

庭に出ることと、母が早くに死んでしまったことは、本来なんの関係もないことなのだと思う。でも父はそれを気にして、私が母と同じことをするのを嫌がった。

(お母さまを思い出すから？)

きっとそういう面もあるのだろう。

だけど私にしてみれば、母が好きだったものは好きでありたいし、母がしていたのと同じことをしてみたかった。短い期間しか一緒にいられなかった分を、母の足跡を捜すことで埋めたかった。

「……お嬢さん……」

「え？」

しんりみと深い声で呼ばれて、私はまたタオルに戻していた視線をあげた。

「タオルを返していただけますか？」

「あ、うん」

濡れたところは拭きおわっていたから、おとなしく差し出す。

今度はカイのほうで腕を伸ばし、窓の内側でタオルをつかんだ。しかしその手は、受け取ったあともそのまま戻されず――

「え……？」

それどころか、手はさらに伸ばされ私の顔をなでたのだ。

「すみません、涙が」

「――っ」

私は咄嗟に振り向いて顔を隠すと、素早く両目を拭う。

(嫌だわ)

泣くつもりなんて全然なかったのに。

庭の前ではいつも、笑顔でいたかったのに。

「もう平気よ。さあカイ、仕事に戻って？」

必死に取り繕ったあと、再び窓のほうに向きなおると、カイはひどく神妙な顔をしてこちらを見ていた。

「カイ……？」

「あの、お嬢さん」

「なに？」

自分から声をかけたくせに、言いづらそうにもごもごと口を動かし、

「えっと……ひとつ、提案があるんですが」

カイの視線は自由に宙を舞っていた。

「なによ、もったいぶって」

一体なにを言い出すのか、まったく予想できない私が口もとを隠して笑うと。

(あ……！)

不意に、カイの表情が変わった。

まるでなにかを決心したように。

それから大きく息を吸い、

「僕の弟子になりませんか!？」

「――え？」

その頃庭は、ホースのついた蛇口をとめていなかったせいで、これ以上ないくらい水びたしになっていた。



先代の庭師と母は、父が焼きもちを焼くほど仲がよかったという。だからカイだって、先代の庭師から母のことを聞いていたのかもしれない。

カイは私が泣いた理由をなにも訊かずに、それでも私を庭へと誘ってくれた。父にはばれないように、変装して出ればいいと提案してくれたのだ。

男の子用の服を調達し、髪の毛をまとめて隠せる帽子も用意してくれた。ただ、そのツバの広い麦わら帽子には、風で飛ばされないようアゴに付けるゴム紐がついていて、正直に言うところちょっと戸惑った。

(コロニーの明日を決める権利を有したお父さまは、高い身分にあることを誰よりも誇っている

)

だからこそ、その娘である私には多くの制限がかけられていたのだけど、そのうちのひとつに「平民のような恥ずかしい格好はしない」というものがあったのだ。

私自身は簡素な服が好きで、まわりのみんなの格好が恥ずかしいものだなんて思ったことはない。それでも、ゴム紐のついた帽子にはさすがに困ったのだった。

(ウエストがゴム紐のズボンはアリなのよ、だって外からは見えないもの)

だけど帽子ではそうもいかない。まっ白なゴム紐がこれでもかというほど主張してしまう。

――そんなふうには、私が帽子をかぶれずに迷っていると。

「女の子って、変なところを気にするんですね」

カイはそう苦笑しながらも、ゴム紐を隠すように花柄のハンカチを巻いてくれた。そのハンカチは、また私が濡れたときのためにと用意しておいたものらしかった。

「変じゃないわ、重要なことよ」

そうして私はやっと、庭に出る準備を整えることができた。唯一の恥ずかしいポイントだった帽子のゴム紐が、男装した私の唯一のおしゃれポイントになった。

(ありがとう、カイ)

私は父に、「ありがとう」と「ごめんなさい」を言う回数すら決められている。

身分の高い者が、簡単に下の者に言うべきではないと。

だから私はそれらを口に出すことが苦手だった。

頭のなかで考えることはできても、言うタイミングを掴めなかったのだ。

(いつかまとめて、言えたらいいな)

カイの背中を追って庭を歩きながら、そんなことを考えていた私を。

「ではお嬢さん、まず花の手入れの仕方からいきましょうか」

いろんな種類の花が並ぶ花壇のほうへと連れていくカイ。

「ねえカイ、庭にいるときは敬語使わなくていいわよ？ あと、私のことは『お嬢さん』じゃなくって『リン』って呼んで」

私の名前は『リンダ』だけど、さすがにそのままではばれる確率が高くなってしまいうだろう。その点『リン』ならば、男の子でも結構いる名前だから不自然ではない。

「え……と、あの、それはちょっと……」

しかしカイは、先代の庭師からきつく言われていたのだろうか、思い切り困り顔をつくると、助けを求めるような瞳を私に向けてきた。

「そんな顔してもダメよ。今の私はあなたの弟子なのだから、それなりの対応をしてもらわないと」

きつく言ってやったらカイは、自分の帽子をさげて顔を隠してから。

「――はい、わかりま……わかったよ、リン」

「よろしくね、師匠！」

「し、師匠!? あの、僕も名前がいいで……いいよ？」

「わかってないわね、カイ。どこの世界に自分の師匠を呼び捨てにする弟子がいるのよ」

「ぐ……っ」

「ほら、さっそく教えてください師匠！」

「お、おうっ、任せとけ！」

半分はやけくそのように、最後にはカイも納得してくれた。

——それからは、毎日のように一緒に庭に出て、いろんなことを教えてもらった。

庭にどんな植物があるのか、それぞれどういう世話をしなければいけないのか。

水さえやればどんな植物でも勝手に育つと思っていた私は、結構ショックを受けたものだ。

(「人間と一緒に」って、そういう意味もあったのね)

いろんな性格の人がいて、異なった対応をしなければならないように。

植物にもいろんな性質があって、世話を間違えると簡単に死んでしまうのだ。

それを知った私はふと、

(もしかしたらお母さまは、子どもを育てるように植物を育てていたのかな?)

そう考えた。

母は子どもが大好きだったけれど、身体が弱くて私を産んだときにはもうおなかを痛めていた。だから次の子どもなど当然望めず、そのかなしさを緑で癒していたのかもしれない。

庭に出るようになった私が知れたことは、もちろんそれだけではない。

カイと長時間一緒にいることによって、屋敷の外の様子や、世界の情勢まで知ることができた。

「黒い星の話は知ってる？ リン」

新しい花を植えるために、スコップで土をやわらかく混ぜこみながら、カイがそんな話題を振ってきたことがあった。

「えーと……確か、人がこのコロニーに来る前に住んでいた星のことよね」

「そう、動植物が住めなくなってしまった死の惑星。僕の夢はね、その星をよみがえらせることなんだ」

「それって、『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚』になるということ？」

もう一度人の住める星に戻すため、命をかけて星に降りる人々のことをそう呼ぶ。それくらいは、世間に疎い私でも知っていた。なぜなら私の父も、その計画に一枚噛んでいたからだ。

しかし意外にも、カイは横に首を振り。

「違うよ、そういうのじゃなくて、なんて言うのかな……研究者として、ちゃんと確実な方法で緑を取り戻したいんだ」

(——！)

おそらくカイも私の父が関係していることを知っていて、精一杯言葉を選んだ結果なのだろう。

確かに『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚』計画は、決して確実なものではないのだ。一般人を手術によって黒い星に順応できるようにし、送りこむ。そして少しずつ少しずつ、大地にはびこる黒い色を抜いていく作業は、『^{デザート・フィッシュ} 砂漠の魚』の気持ちひとつで簡単に頓挫してしまう程度のもの。それなのに、志願者だってたいしているわけでもない。百パーセント戻ってこれないとわかっている場所

だから、仕方のないことではあるのだけど。

「――そうね、もっと安全で確実な方法があるのなら、お父さまだって絶対にそちらを選ぶと思うわ」

カイのあけた穴に、花の種を落としながら応える。

(こうやって簡単に植物を増やせる大地なら、誰も苦労しないのに)

偽ものの星^{コロニー}をつくる技術はあっても、まだ星に還るすべを持たないことがもどかしい。

そう感じてしまうのは自分が、そういう段階になったときまっさきに還ることのできる存在だからなのだろうか。

「リンもそう思う!? 僕、頑張るよ。いつかリンを青い星に還してあげる」

穴を再び土でふさぎながら、嬉しそうな声をあげたカイも、どうやらそのことをわかっているようだった。

(偽ものの星と)

偽ものの太陽を捨てて。

本物の星に、本物の太陽を連れて還る。

それはなんて素敵な夢なのだろう。

「楽しみにしているわ、師匠」

心から告げたら、とたんに恥ずかしそうな素振りを見せたカイが、やっぱりかわいかった。

私は日に日に詳しくなる。

庭のこと、世界のこと——そしてカイのこと。

「そう、師匠には妹がいるのね」

その日はふたりして土の上にしゃがみこみ、雑草を抜きながら話をしていた。

「うん、口は悪いし乱暴だけど、いつも明るくて僕を励ましてくれるから、すごく助かってるよ」

「ずっとふたりなの？」

「そう、早くに両親とも死んじゃったからね。貧乏でつらいこともいっぱいあったけど、今はこうしてちゃんとした仕事にもつけたし、妹もまだ生きてるし、幸せだ」

(幸せ——)

泥だらけになって草取りをしながら、一点の曇りもないような笑顔で告げられた言葉に、私は胸を突かれたような気分になる。

(幸せ、かぁ)

きょうだいのいない私。でも父はまだ生きている。

きょうだいのいるカイ。でも両親は死んでいる。

貧乏だったカイ。でも自由に生きることができた。

裕福だった私。でも自由に生きることができなかった。

羨ましいと思う部分と、そうでない部分。

全部ひっくるめても自分が幸せだと言える心を、私はやっぱり羨ましく思った。

(誰が見てもきつと、「恵まれている」と言われるだろう私が)

屋敷のなかで過ごすよりも、こうして庭に出ているときのほうが幸せだなんて言ってしまったら。

叱られるだろうか。

傲慢だと。

それは屋敷のなかでの暮らしを知っているからだ。

罵られるだろうか——？

「……！ 待ってリンっ、それ雑草じゃないよ！」

「んっ!？」

考えごとをしながら草取りをしていたら、あやうく守るべき草まで抜きそうになってしまった。——というよりも、すでに半分は抜いてしまっていた。

「あ……」

(ご、ごめんなさい！)

心のなかでは謝れているのに、どこか鋭い視線を向けてくるカイの顔を見たら、なにも言えなくなってしまった。

「リン、なにか考えごとしてた？」

「う、うん、ちょっと……」

「もしかして、植物なんかまた植えればいいやって思ってる？」

「まさか！ そんなことは思ってないわよっ」

　　だいいちここは、母が大切にしていた庭なのだ。だからこそ自分で手入れできることが嬉しくて、父の言いつけを破ってまでも庭に出ているのに――

　　カイの言い草に、ひどくかなしくなった。

「じゃあ、なにを考えていたの？」

　　それでもなおも訊いてくるカイ。

(どうしたの?)

　　どこかがおかしい。

「カイ？」

「――コンヤクシャのこと？」

「え？」

　　一瞬、なにを言われたのか全然わからなかった。

(コンヤクシャって……婚約者!?)

　　思わず手にしていた草を取り落とし、私はその場に立ちあがる。

「それってなんの話？ 私に婚約者なんていないわよ」

「嘘だ。だって旦那さまが言ってたよ。リンには婚約者がいて、部屋にいるときはいつもその人の写真ばかり見ているって！」

　　負けじと立ちあがって叫んだカイの言葉に、私は啞然とした。

「そんな……」

(一体なんの話?)

　　それは本当に私のことなの？

　　私には本当に婚約者などいないし、むしろ父は「おまえを嫁になどやらない」と豪語するような人だった。屋敷から出られないのは退屈だったけれど、好きでもない相手の妻にされるくらいならば百倍マシだと思ったから、おとなしく言うことを聞いていたのだ。

(それが今さら、婚約者ですって?)

　　嘘に決まっている。

　　そしてそういう嘘をつくということは、きっと――

「もしかしてお父さま、私がこっそり庭に出ていることを知ってしまったのかも。だからそれをやめるよう、あなたに嘘をついたのよ」

「どうして僕に？」

「私に婚約者がいたら、あなたも男の子だから誘わないとでも思ったのじゃないかしら」

「――じゃない」

「え？」

　　カイの表情は、まだ硬かった。

　　私の言葉を信じ切れていないのだろう。

——そう思った私は、きっと、間違いだった。

「僕は『男の子』じゃない。『男』だよ、リンダ」

カイは素早く私の手をつかまえると、引いた。

私の身体はたやすく傾き、カイのほうに倒れこむ。

「きゃっ」

(カイを潰しちゃう!?)

その瞬間まで、私は本気でそう思っていた。

年下のカイを、弟のようにかわいく思っていたから。

「リンダ——」

しかしカイは、意外な力強さで私をしっかりと支え、抱きしめてきたのだ。

邪魔な麦わら帽子を後ろにずらされ、耳もとでもう一度名を囁かれた私の背中に、ぞくりと衝撃が走る。

「カ、カイ!？」

「僕にこんなことを言う資格がないのはわかってるから、一度しか言わないよ」

表情が見えないからこそ、声音から伝わってくる。

「大好きだよ、リンダ」

めまいがするほどまっすぐな想い。

それからカイはすぐに私を放すと、庭の木々にまぎれて走っていった。

私は立っていることすらできずに、その場にへたりこむ。

「……カイ……」

これまで何度も呼んできた名前なのに、まるで特別な呪文のように思えた。

(今さら)

今さら私は、自分の気持ちを自覚していた。

あがってしまった体温を、うまくもとには戻せない。

背中にまわされていた手が、まだそこにあるような、不思議な感覚。

(なんなの、これ……)

明日からどういう顔で逢えばいいのかも、わからなかった。

ケンカをしたわけでもないのに、こんなことは初めてだ。

「——お嬢さま？ どこにいらっしゃいますかー？」

(あ、大変っ)

不意に屋敷のなかから私を捜している声が聞こえて、私は焦って立ちあがった。でもまだ足もとがおぼつかなくて、一度土の上に派手に転んでしまう。

「うう……」

(着替えたとしても、ごまかすのが大変だわ)

けれど私はやらなければならない。

もう一度。

何度でも。

この庭で、カイと逢いたいから――。

今度こそしっかりとした足取りで立ちあがると、こっそり着替えに使っている小屋へ走り出した。



「僕にこんなことを言う資格がないのはわかってるから、一度しか言わないよ」

カイはそう言っていた。

(『資格』ってなんのこと?)

そう考えたとたんにはわかってしまったのは、私が『こちら側』の人間であるからなのだろうか。

父がいつも言っていたこと。

身分の高い者と低い者。

雇う者と雇われる者。

きっとそういう意味で、カイは告げたのだろう。

(でもそんなの、私は気にしないのに)

カイは私がこれまで出逢った人のなかで、最も純粋な目を持っていた。

私を見る大人たちのように、視線のなかに見える欲望も期待も、なにもなかったのだ。

だから私も自然体で接することができた。

私自身それに気づかないほど。

(――だけどお父さまは、そうじゃないのね)

カイとうまくいったら、私はきっと死ぬまでこの屋敷にいることになるだろう。そしてそれは、父の望みと合致するはずなのに。

(それよりもカイを好きになることのほうが、気に入らない?)

もともと父は、私と歳が近いカイを雇うことには反対していたのだ。しかし先代の庭師が、カイを「弟子のなかで最も真面目で腕が立つ男だ」と評し強く推したから、しぶしぶ了承したという感じだった。ただその後は、カイの評価通りの働きぶりに満足していたようなのだけれど――

(今のカイを、一体どう思っているのかしら?)

私は訊いてみたくなった。

いつもは先に寝てしまうところを、父が帰るまで待ってみる。

忙しい父は毎日、朝早く家を出て夜遅く戻ってくるのだ。だから私が普段どおり暮らしていたら、顔を合わせる機会はほとんどない。屋敷の使用人たちが「旦那さまは奥さまのいないさみしさを仕事で紛らわせている」と噂していたけれど、それは多分間違いではないのだろう。

(そのせいで、私にさみしさが募っても)

私は母にはなれないのだから、仕方がない。

そう自分を納得させていた。

でも――

(――！ お父さまが帰ってきたわ)

家の前で停まった車の音に、ドアの開く音。使用人たちが屋敷から飛び出し、にわかに騒がしくなる。

私も急いで部屋から出ると、玄関ホールへと向かった。

「あらお嬢さま、まだ起きていらしたの？」

「ええ、ちょっとお父さまに話があって」

周囲の不可解なものを見るような視線をかいくぐり、私は父のもとへと急ぐ。

「お父さま！」

逃がさないよう先に声をかけてから、近づいた。

父を取り囲んでいた使用人たちが、いっせいに私のための道をつくってくれる。

「リング、おまえが出迎えとは珍しいな」

(出迎えたかったわけじゃない)

でも、疲れ切っているはずなのにどこか嬉しそうな父の表情を見ると、否定はできなかった。

「大事な話があるの。疲れているところごめんなさい、でも聞いてほしくて」

その分ごまかされないよう、わざとせっぱ詰まった声音で話す。

軽く言ってしまったら、父は「明日な」と簡単にかわしてしまう気がして。

「……ふむ」

案の定父は、一度周りの使用人たちに目を這わせてから再び私を見た。誰かが「お嬢さま、明日になさったら？」と言い出すことを期待したのかもしれないけれど、みんなだって私がろくに父と会えていないことを知っているから、視線で協力してくれているのだ。

「いいだろう、私の部屋に来なさい」

父はそう告げると、コートを使用人に預けてから歩きはじめる。私もすぐにそのあとを追った。

もう何年も暮らしている屋敷のなかなのに、まるで違う場所に来てしまったかのような、奇妙な感覚。何度も見てきた父の背中さえ、別人に思えて――それくらい、おそらく私は緊張していたのだ。手は自然と胸のあたりをおさえ、足取りは床が間違いなく続いていることを確かめるがごとく慎重だった。

「おまえが訊きたいのは、婚約者のことか？」

「……！」

前を歩く父が、歩みをとめないまま訊いてくる。

(やっぱり、お父さまは予想していたんだわ)

さきほど私が玄関ホールに行ったとき、「珍しいな」とは言ったけれど驚いたふうではなかった。きっと私が起きて待っているかもしれないと、わかっていたのだ。

それならば――

「やっぱり、嘘なんでしょう？」

私は足を速めて、父の横に並び顔を見あげた。

私が婚約者の写真を眺めているという話が嘘であることは、当然私自身がよくわかっている。

しかし問題は、『私の婚約者』が本当に決められたのかどうかだ。それは決定権のある父にしかわからないことだったから。

父はちらりと私のほうを見ると、目尻にしわをいっばいためて笑った。

「私がおまえを手放すと思うか？」

ふたりきりのときは、こうしてたまにやさしい顔も見せてくれる。それだけでさみしさが一瞬にしてやわらぐ。

私はその顔が好きだった。

でも、今は。

「――それなら、どうしてカイはダメなの？」

不意に父の足がとまり、私は父を追い越した。それからくるりと身体の向きを変え。

「カイにあんな嘘をついたのは、そういうことなんでしょ？ でもお父さまには悪いけど、私、きっとカイが好きだと思うし、カイとならずっとこの屋敷にいられると思うの！」

反論される前に、全部言ってしまった。

(うん、私はカイが好きなんだ)

突然の告白で、心の整理が追いついていなかったけれど。

人を好きになることが初めてで、弟みたいなものなのだと自分に言い聞かせていたけれど。

本当は違う。

それを、改めて口に出してみてもやっと確信できたのだ。

父はまっすぐに私を見返してくる。その視線にはもうやさしさはなく、ただ厳しさに満ちていた。

そうしてしばらく押し黙っていた父は、

「やつは、おまえとはつりあわない」

それだけ口にするると再び歩きはじめた。

「待ってお父さま！ 私はどうせこの屋敷から出ないんだから、つりあうとかつりあわないとか、そういうのはどうでもいいことでしょう!？」

私の横をするりと通りすぎようとした父の、袖をつかんで逃がさないように追いつがる。

しかし父はその手をあっさり振りほどき。

「どうでもいいものか。外に知られればそれが私の弱みになる。おまえの人生には、私だけではなくこのコロニーの運命までがかかっているのだ」

「な――」

思わず絶句した。

自分の存在が、そこまで重要なものだとは思っていなかったから。

父がそれほど危機感を抱いているなんて――。

今度は私が足をとめる番だった。

父は構わずに足を動かし、とうとう自分の部屋の前だ。

「……だがまあ、すでにここで死ぬまで生きる覚悟をしているおまえに免じて、一ヶ月だけ恋愛を楽しむ時間をやろう」

部屋のドアを閉める前に、父はそんなことを言った。

言葉は、右から左へと通りすぎる。

なにも考えられなかった。

(今日は私から告白しよう)

私はそう決心していた。

昨日カイからもらった言葉は、かなしい夜を経てよりあたたかなものになった。

(お父さまがくれた時間は、一ヶ月)

それが過ぎたら一体どうになってしまうのか、私にはわからない。でも父のことだ、そう簡単にカイを消したりはしないだろうし、お互い生きていればいずれまた逢えるときが来るかもしれない。

それならば、今は素直に楽しもうと。

『普通の恋人同士』みたいに、手を繋いでみよう。

そもそも『普通の恋人同士』なんて知らないくせに、そんなことを思った。

私を嘲笑うかのように、その日一一時間になってもカイは来なかった。

(どうして.....?)

私はすでに着替えて、いつもの麦わら帽子をかぶり、庭の隅にひとり立っている。

今までこんなことはなかった。

庭に出るときはいつもカイがそばにいて、笑いかけてくれたから。

どんなに母を思い出しても、さみしくはなかった。

でも誰もいない今は、ひどくさみしい一一

(カイ、恥ずかしがってるのかな)

昨日あんなことを言ってしまったから、あのとき私が思ったみたいに、どんな顔をして逢えばいいのかわからずにいるのかもしれない。

.....そうであればいいと、思う。

本当は父が裏で手をまわしていて、もう二度と来られないようになっていたなんてことが、起こっていなければいい。

(一一迎えに、いってみようか)

屋敷の外となかを隔てている高い塀を見あげて、私は不意にそんなことを考えた。

カイは屋敷に住みこみで働いているのではなく、妹と暮らしているアパートから通ってきているのだ。だから裏口の鍵を持っていたし、私もこっそりとそのス ペアをもらっていた。きっと、父だってそのことには気づいていたのだろう、私がカイと親しくしている時点で。それでもそれを取りあげなかったのは、昨夜父自身が言っていたように、私がちゃんとこの屋敷のなかで生きていくことを覚悟しているのだと伝わっているからだ。私がこのなかでしか生きていけないことを、誰よりも自覚できているから。

(それなのに出ていったら、驚くだろうな)

もっとも、今はただカイを迎えにいくだけで、一生戻ってこないわけではない。だから本当の意味では全然背いていないのだけれど、今までの私からしてみれば驚かせるのに十分なことだった。

そっと裏口のある庭の奥へとまわりこみ、見まわりの警備員が通りすぎるのを待つ。

(鍵をもらっておいてよかったな)

ついでに、カイからアパートの場所を聞いておいてよかった。会話のなりゆきで聞いたことだったけれど、まさか自分がそこを目指すことになるなんて。

ひとりちいさく笑ってから、誰もいなくなった裏口で私は作戦を開始する。素早く鍵を開き外に出てしまえば、男装している私に気づく人はいないだろう。なぜなら、私はほとんど屋敷の外に出たことがないからだ。それはつまり、私の姿を見たことがある人が少ないということを表していた。今の私を見ても、『屋敷のお嬢さま』とイコールでは結べないはずだ。

(ええと、裏口を出てから右の道を行くんだったわね)

記憶を頼りに、歩き出す。

「カイもこの屋敷に住めばいいのに」

私がカイにそう告げたのが、アパートの場所を教えてもらったきっかけだった。

「でも僕、妹と暮らしているから。さすがにそこまでお世話になるわけにはいかないよ」

そのときカイはそう笑って、そのアパートがいかにボロなのかを大袈裟に語って聞かせてくれた。

(でもすごく、幸せそうだったな)

私が行ってみようと思ったのは、そのせいもあったかもしれない。

行ってみたいと思ったのは。

(右、左で、次も右、だったよね……あれ?)

カイが土の上を書いてくれた地図を、頭で思い描きながら歩いてきたのに、曲がらねばならないところに道がなかった。どこで間違ってしまったのだろう。

(角を数え間違ったのかな?)

それとも曲がる方向を?

わからない。

なにが悪かったのか、見当もつかなかった。

(……一度、戻ろう)

頭の地図を逆向きにして、屋敷まで戻ろうとまわれ右をする。

「――！」

私はそこで、固まってしまった。

(あれ……どっちだっけ?)

このあたりは住宅街なのか、似たような建物ばかりが並んでいた。おまけにきれいに区画整理されているせいで、自分が一体どの方向から来たのかもわからない。

思わずその場に、しゃがみこむ。

(これが迷子というもの?)

おそらく、通行人にでも尋ねればすぐに解決するのだ。歩いているあいだにキョロキョロとあたりを見まわしていたけれど、うちの屋敷ほど大きな建物はなかったから。屋敷の場所を訊けばいい。

ただ、話しかけるのが怖かった。

私はまったく知らない人と話すということが、ほとんどなかったから。

誰も私を知らない世界に出ることが、なかったから。

(やだ……今さら怖いなんて)

屋敷を出たときには感じなかった恐怖が、静かに胸の内側からせりあがってくる。カイのことだけを考えているあいだは平和だったのに、今はもう、ダメだ。

全身の震えがとまらず、私は自分の身体を抱きしめるように肩をつかんだ。

――そのときだ。

「あっ、あたしの麦わら帽子！」

(えっ!?)

不意に聞こえた声に、私は顔をあげた。

もちろん、自分が麦わら帽子をかぶっていたからだ。

声のしたほうに顔を向けると、女の子がひとりこちらに走ってきていた。やっぱり私に向かって言ったらしかった。

「なあなあ、あんた、もしかして『お嬢さん』？」

すぐ近くまでやってきたその子は、まだしゃがんでいる私の周りをくるくるとまわりながら、女の子とは思えない乱暴な口調で訊いてくる。

「あそこの、大きなお屋敷の、リンダお嬢さんか？」

「え、ええ、そうよっ」

(この子、私を知っているんだわ)

そう思ったら、素直に返事をしていた。

万が一にでも悪い人かもしれないなんてことを、考える余裕はまるでなかった。

「やっぱりそうか～」

女の子は嬉しそうにときおり飛び跳ねながら、なおも私の周りをまわりつづける。

「んじゃ、兄貴に逢いにきたのか？」

(お兄さん？ ー！)

そこで私はピンと来た。

(この子、カイの妹さんね！)

この麦わら帽子はもともと彼女のものだったのだ。

私はやっと落ちついて立ちあがると、

「違うわ、私はカイを迎えにきたの」

(逢いにきたんじゃない)

逢うだけなら、連れて帰れない。

私はカイと庭で過ごしたかった。

――もしかしたら、母にカイを見せつけたかったのかもしれない。

「わあ、ロマンチック！ ロマンチック！」

カイの妹はやっと足をとめると、

「あたしが兄貴のところに連れてってやるよ。昨日からずっと落ちこんでて鬱陶しいったらありやしない」

私の手を乱暴につかんで引っ張り出す。

(『口が悪くて乱暴』って、こういうことだったのね)

カイが言っていたことを思い出して、心のなかでそっと笑いながら。

「……ありがとう」

自然に、唇の先からお礼が出た。

言えた。

そこで私は、気づいてしまった。

(そっか、私がカイに素直になれなかったのは)

相手がカイだったから。

きっと最初から惹かれていて、素直になるのが怖かったからなのだ。

ふわりとあたたかいものがこみあげてくる胸のなか。

私の手を引く彼女の手もあたたかい。

「こっちこっち。階段抜けるかもしれないから気をつけて！」

恐ろしいことを口にしながらも、少しもスピードを緩めずにあがっていく。だから私もそれについていくしかなかった。

「兄貴？ 兄貴！ お嬢さんが来てくれたぞ〜っ」

その途中から二階に向かって声をかけたら、バタバタと大袈裟な足音が聞こえはじめる。

「だからおまえ、いい加減嘘はやめろって――あれ？」

嘘だと思いつつも飛び出してきたらしいカイは、やっと階段をのぼりきった私と顔を合わせるなり固まった。

「……………本当にお嬢さん？」

たっぷり間をおいてから告げられた確認に、

「別人に見えるかしら？」

いじわるを返したくもなる。

だけどカイも負けてはいなくて。

「――僕の弟子に見えるよ、リン」

耐えきれなくなったのは、私のほうだった。

「カイ……！」

飛びこんでいったら、ちゃんと受けとめてくれた。

「バカ！ なんで今日来なかったのよっ、待ってたのに！」

「ごめん、なんか行きづらくって……」

「私に告白もさせないつもり？」

「っ!？」

顔をあげて、斜め下からカイの顔を見あげた。

ほんの少し逢っていなかっただけなのに、少し大人びたようにも見えて。

「あなたが気づかせてくれたのよ。私にもちゃんと恋心があるんだって！」

「リンダ……！」

私を包む腕に、力がこもる。

「だけど、旦那さまは——」

私を包む腕が、少し震えている。

(やっぱりそれを心配していたのね)

今日屋敷に来られなかったのも、もしかしたらクビを言い渡されることを恐れたからなのかもしれない。

私も腕を伸ばして、カイの背中を包みこむ。

「そのことなら大丈夫よ。お父さまも許可してくれたから」

「えっ？ 本当に!？」

「ええ——」

(たった、ひと月分だけれど)

私は後半を胸にしまった。今はただ、幸せを噛みしめたかったから。

互いに抱きしめあう腕を、なににも邪魔されなくなかった。

「あ、あの、リンダ？」

「なあに？」

「その……キス、してもいいかな」

(——！)

高鳴る胸が、痛い。

だけどそれに答えたのは、私じゃなくって。

「大丈夫だ兄貴、あたしなら目えつむってるから！」

「おまえなあ！」

それでも、いつもと違う様子のカイが見られて嬉しかった。

私は——

「うわ!? リ、リンダっ？」

そっと頬にキスをしてあげた。

やっぱり初めてのキスは、ふたりきりのときにしたかったから。

「うわあ、いーなー、いーなー。あたしもロマンチックな恋した〜い」

妹に冷やかされ、太陽のようにまっ赤になるカイ。

「そう思うなら、その性格と言葉遣い直せよシアっ！」

「えー？ 兄貴には言われたくないよ」

「なんだとおー!？」

まだカイの腕のなかに抱かれながら、私は笑っていた。

心から笑えた。

(本当に、太陽みたいだよ、カイ)

空につくられた偽ものの太陽なんかじゃなくて。

ちゃんと私の暗い心まで照らしてくれる太陽。

ずっと。

ずっと。

私の空にのぼっていてくれればいいのに――

でもきっと、太陽であるがゆえに、そうはいかないのだろう。



楽しい時間ほど、過ぎるのは早い。

誰かがそう言ったのを、聞いたことがある。

でも毎日同じような日々をくり返していた私には、その感覚がよくわからなかった。なにをしても、時間は等しく過ぎていくように感じていたから。

(だけど――)

カイと恋人同士として過ごした時間は、本当にあっという間に過ぎていった。ひと月がこんなに短い時間だったなんて、今までまったく気づかずに生きてきたのだ。

私は。

(明日、カイはどうなるの……?)

それだけを、心配していた。

今日で終わってしまった一ヶ月。

なにごともなく「また明日」と手を振った。

永遠に来ないかもしれない明日に、また逢おうと。

私は必死に涙をこらえていた。

逢えるかどうかもわからなかった。

また逢えるほうに賭けたかった。

だから言わなかった。

最後まで。

私は隠しとおした。

父の言葉。

「一ヶ月だけ恋愛を楽しむ時間をやろう」

それが過ぎたら、私たちは一体どうなるのだろう？

――最初に示された答えは、覚悟できていたものだった。

(やっぱり、来ない……)

カイが私に告白してくれた翌日と同じように、いくら待ってもカイは庭に現れなかった。でもあのときと明らかに違うのは、来ない理由がカイの意思ではないということ。きっとカイの身に、なにかが降りかかっている。

直感した私は、すぐに屋敷を出ようとした。前に一度迷っているため、今度は迷わないようしっかり復習していたから大丈夫。ちゃんとたどりつく自信はあった。

けれど、それは次に示された答えで無駄になってしまった。

「リンダさん……っ!!」

私が裏口から抜け出してすぐ、かけられたのは女の子の声。

そう、カイの妹であるシアちゃんのものだった。

声をしたほうに顔を向けた私は息を呑む。

その顔色が、あまりにも悪かったから。

「ど、どうしたの!? シアちゃん」

「きっと出てくると思って、ずっと待ってたんだ。あのな、兄貴が変なでかい病院に連れていかれちゃった！　なんで連れていくのかって理由訊いても全然教えてくれなかったし、兄貴もなんでか抵抗してなかったんだ。だけど、リンダさんってすごく偉い人の娘なんだろう？　だからどうにかできるんじゃないかと思って……」

「――っ」

声が出なかったのは、状況を理解できてしまったからだ。

しかも、ごく正確に。

(健康な人を病院に連れていく理由?)

健康診断なんて親切なことを、父がするわけがない。

だったら答えはひとつだ。

ひとつしか、なくなってしまった――！

「お願いシアちゃん、私をその病院に連れて行って！」

私が助けてくれると勘違いしたのか、パアッと表情を明るくしたシアちゃんは大きくうなずいた。それからむんずと私の手をつかんで、走り出す。

(ごめんなさい、シアちゃん)

私にはもう、カイを助けられない。

それを知ったとき、シアちゃんはどうするだろう？

私のせいでカイが人間じゃなくなってしまうなんて知ったら。

シアちゃんは、この手をどうするだろう？

(カイは全然抵抗しなかったって)

シアちゃんは言った。

それはつまり、カイがいずれはそうなるかもしれないと、覚悟をしていたということだ。

カイは全部知っていたのか。

甘い時間がそう長くは続かないこと。

いずれ引き裂かれる運命にあること。

その方法が、あまりにも残酷なものであること。

二度と逢えないこと。

(全部全部、知っていたというの……!?)

走りながら、私は涙をこらえられなかった。

視界が歪んで、前が見えなくなっても。

転ばす前に進めたのは、シアちゃんが手を引いてくれたから。

今はまだ、私たち唯一の味方であるシアちゃん。

「リングさんっ、あそこの病院だ！」

視界の隅に映りこんできた建物の大きさに、私は自分の予想が外れていないことを確認する。

(あの手術は、大きな病院じゃないとできないってお父さまが言ってたわ)

もっと近くに他の病院もあったのに、わざわざここを選んだということはやっぱり――

なかに飛びこんで受付の女性に訊いてみたら、カイはシアちゃんが言ったとおりここにいるようだった。

しかし、「逢いたい」というと。

「あなた、リングさん？ あなただけならいいそうです」

「え？」

思わずシアちゃんと、顔を見あわせる。

(実の妹であるシアちゃんをさしおいて)

私と逢うというの？

もう逢えないかもしれないのに？

ただ、なにも知らないシアちゃんは、いつものように頬を赤らめて。

「やだなあ、兄貴ったら。こんなときまで見せつけなくっていいのに」

ロマンチックな状況を羨ましがっていた。

(言ったほうが、いいの？)

でも言ったとしても、逢えるのは私だけだと言われているのだから逆効果かもしれない。

結局私はなにも言えずに、手を振ってくれるシアちゃんに手を振り返し、案内役の看護師さんについていった。

通されたのは、個室だった。

「――カイ……」

「やあ、案外早かったね。シアが迎えにいったせいかな」

笑顔で迎え入れられ、困惑する。

「カイ？」

「ありがとうリング、きみのおかげで僕の夢が半分叶うよ」

手術のあとだからだろうか、ベッドの上に横たわり、少しやつれた様子なのが痛々しい。

「カイ、なにを言っているの」

「これだけは絶対に誤解しないで。リング、僕はきみを恨んでなんかいない」

「っ……」

「短いあいだだったけど、幸せな夢を見せてくれてありがとう。バカみたいに、お礼しか出てこないんだ」

上半身を起こしながら、カイは乾いた笑いを浮かべた。

「カイ――星に、降りるの……？」

私はそれだけ訊くので精一杯。

ニザート・フックス

(『^{アラビヤ・フィッシュ}砂漠の魚』になりたいんじゃないって、はっきりと言ったのに)

それでも降りるといふの？

「うん」

カイは意外なほどあっさりとうなずいてから、両手を広げる。

「リンダ、抱きしめてもいい？」

確認する癖は、変わらない。

だけど、飛びこんだその先の温度が、まるで違った。

(ああー)

もう、戻れない。

カイは行ってしまうのだ。

人のいなくなった惑星に、太陽だけが帰還する。

私に陰を残してー

「カイ……カイ！ ごめんなさいっ、私のお父さまがーううん、本当は、私があなたを守らなきゃならなかったのに……っ」

私の身体の一部どこに、こんなにもたくさんの涙が眠っていたのだろう。流れる水はカイの患者衣にしみこみ、温度のない身体をあたためてゆく。こうして人間に戻ってくればいいのに、そうはならない現実がもどかしい。

「大丈夫だよ、リンダ。これは誰のせいでもないんだ。僕が自分でした取引だから」

「えー？」

やさしく私の頭をなでながら、告げられた言葉はしかし全然やさしくなかった。

「きみの一ヶ月と引き替えに、僕は星へ降りることにした」

「な……!？」

「僕はどうしてもきみを僕のものにしたかった。でも身分を越えることは、きみが思うほど簡単なことじゃないんだよ」

混乱して、頭がうまく働かない。

ただ涙だけが、とめどなく流れた。

「リンダ、そんなに泣かないで。これでも僕は結構幸せなんだ。本当だよ」

やさしい声が、よけいに胸を刺す。

「カイ……カイー」

名前しか呼べない私の背中を、カイは子どもをあやすようにさすってくれる。

(ぬくもりは)

消えてしまったぬくもりは、一体どこへ還るのだろうか？

「ねえ、リンダ」

耳もとでそっと名を呼ばれて、私は顔をあげた。

落ち着いてきてはいたけど、相変わらずなにを憎めばいいのかわからなかった。

きっと私は、からっぽだったのだ。

「抱いても、いい？」

律儀に確認してくるカイに、私は言葉のかわりに身体を預けた。

(満たしてほしい)

私がこれからも生きていけるように。

失うものがどんなに大きくても、耐えられるように。

私の憎しみを全部吸い取って。

星に還して。

(あなたを)

私のなかに置いて行って――

言葉にならない想いは、触れあう肌から移りこんでゆく。

「ありがとう」をくり返すカイと。

「ごめんなさい」をくり返す私。

それでも、きっと幸せだった。

あなたを好きになれてよかったと、心から思うことができたから。

――そんなひとときの幸せを終わらせたのは、偽ものの太陽が呼び起こす朝だった。

【4】

「え？ 今なんて言ったの？」

「妊娠していますよ、リンダさん。おめでとうございます」

ここ数日体調がすぐれずに、医者に診てもらったらそんなことを言われた。どうやら、その可能性を危惧していた父が、普通の医者ではなく産婦人科医を呼んでいたらしい。

恭しく頭をさげた医者に、私は笑顔を取り繕って応える。

「――ありがとう」

まるで呪いのような、お礼の言葉。

出してしまえば簡単なのに、私は結局最後まで、彼には言えなかった。

(好きになってくれてありがとうって)

私にも、夢をくれてありがとうって。

言えなかったのに、私は新しい命を授かってしまったというのか。

もちろん、嬉しさはあった。

あのあとすぐ星に降りて、もう二度と逢えなくなってしまった彼のかわりに、子どもをずっとそばに置いておけるのなら、さみしさもまぎれるだろう。

(……！)

そう考えたとき、初めて私は、本当の意味で父の気持ちを知ることができたと思った。

母のかわりに、ずっと私をそばに置いている父は。

私と同じ状況になって、満足だろうか。

同じ気持ちを共有できるようになって――。

「お父さま、私、妊娠してるんだって」

それを確かめたくて、私は自分で父に報告した。「驚かせたいから自分で話す」と、屋敷のみんなには口どめをしておいたのだ。

しかし父はやっぱり予想していたのか、たいして驚きもせずに。

「そうか、それはよかったな」

それなりに、喜んでくれた。

私を屋敷に縛るものが増えて、嬉しいのだろうか。

どうせ嫁に出す気はないから、子どもができて父の計画に影響はないのかもしれない。

「墮ろせと言いたいところだが、それではおまえまで死にかねんからな」

父は笑う。

「産んでもいいが、徹底的に隠せ」と。

私にしか見せない笑顔で、言い放つのだ。

――そんな父の言い分が変わったのは、実際に子どもが産まれたときだった。

その場にいた誰もが息を呑んだ。

産まれてきた赤ん坊は、なぜか赤い眼と赤い髪を持っていた。

(ありえない)

そういう子どもは、存在しないはずなのに。

そんな不吉な子どもは。

「『デザート・フィッシュ 砂漠の魚』 同士の子であれば、ありうるという話だったが――」

父もさすがに予想外だったのか、そう眉をひそめて。

「まさかおまえ、勝手に星へ降りる手術なんぞしていないだろうな？」

「私にそんな自由があると思う？」

「ふむ……」

出産が終わったばかりで疲れ切っている私にも、父の言葉は容赦ない。

「やはりダメだ、リンダ。この子は諦めろ」

「なにを言うの!? せっかく生まれてきたのに……っ」

「この見た目では、ばれたときのリスクが高すぎる」

「お父さまっ!!」

結局はそこなのだ。

(お父さまにとって、いちばん大切なものは)

自分自身の地位と、それに付随するこのコロニーそのもの。

他のものにはさして興味がないのだろう。

きっと、私自身にも。

(もしお母さまが生きていたなら、違っていたのかもしれないけれど)

今の父には、なにを言っても無駄なように思えた。

私には父の考えを変える力はない。

今できるのは、大切な子どもの命を守ることだけだ。

「――私が、自分で処分するから」

「ん？」

珍しく、父の顔に動揺の色が走った。

「私が自分でなんとかするから。お願い、お父さまはそれまで手を出さないで」

強い視線で、父を見あげる。

(父が手を出したら、この子をきっと殺してしまう)

そうなる前に自分で手を打つ必要があった。

「――そういう表情をすると、あいつとそっくりだな」

やがて父は「ふっ」と笑い。

「いいだろう、少しだけ待ってやる」

(少しだけ?)

その不安定な言葉に、私は急がねばならなかった。

急いでこの子を、この牢獄のような屋敷から連れ出さねばならなかった。

しかしずっとここで過ごしてきた私に、子どもを託せるような相手などいなくて。ちっぽけな頭で考え出せたのは、孤児を引き取って育てているという場所に置いてくることだけだった。

(この子を、捨てる……?)

殺されたくないから、捨てるのだ。

この子が幸せに生きていくために。

私たちの証しを、残すために。

(捨てよう――)

そう決めてから実際に手放すまでには、やっぱり結構な時間がかかってしまった。

子どもだと思うとどうしても捨てられなかったから、これはただの『荷物』なのだと自分に言い聞かせた。でも部屋を出ようとするのと泣けてきて、そんな顔で外を歩くのは目立ちすぎるから、なかなか外には出られなかったのだった。

それでも人に頼もうとは思わなかったのは、父が心配するような理由からじゃない。

(最後の最後まで)

かけがえのないこの重さとぬくもりを感じたい。

それだけだった。

――やっとなんかこの手から失われた今、私のなかにはなにも残っていない。

ただ『心配』の二文字だけがどんとどんと積み重なって、その隙間を埋めてゆくのだ。

(荷物はちゃんと、気づいてもらえたかな)

世話をしてもらえているかな。

今日も、生きているかな。

考えれば考えるほど、心は静かに押し潰されてゆく。

満足にミルクも与えられていないかもしれないと思ってしまったら、食べものが喉を通らなくなった。無理して食べても吐き出してしまうのだ。

そんな私の状況を知った父は、気休めになればと知人の赤ん坊を借りてきてくれたけれど、そんなことで効果などあるはずがない。

(だってその子は、赤くなかったもの)

初めてその姿を見たとき、「どうして」と強く思った。

普通の姿だったなら、こんなことにはならなかったのだろうと、虚しくなったりもした。

でも今ならその意味を誰よりも理解できる。

(あれは、私とカイの子どもだから)

どんな状況でも。

どんな一瞬でも。

どんな場所でも。

どんな未来でも。

(見ればわかる)

それが答えだったのだ。

(今なら、言ってあげられる)

「世界でいちばん目立つ色に生まれてきてくれて、ありがとう」って。

「その色に合う幸せを、見つけるんだよ」って。

心になんものしこりもなく、言ってあげられるのに。

(手放してから気づくなんて――)

いつも肝心なところで届かない、自分の言葉が嫌いだった。

(そういえば、「毎日庭をきれいにしてくれてありがとう」とも言えなかったな)

ベッドにぼんやりと腰掛けて、私は分厚いカーテンの掛かった窓を見やる。

彼が星に降りた日に取り替え、それ以来一度も開いたことはない。

庭で過ごした幸せだった時間を、そのまま閉じこめておきたかった。

彼のいない庭も、美しくない庭も、見たくなかったから。

――しかし、鍵は突然開けられる。

「……？」

一瞬呼ばれたような気がして、私はふらりとベッドから立ちあがった。

(ついに幻聴まで?)

考えて、おかしくなる。

しばらく浮かべたことのなかった笑みを浮かべた。

そんな私を、否定するように。

――コッ コッ

今度はガラスを叩く音。

(えっ!?)

窓の外に、誰かいる？

でもこの屋敷の人間ならきっと、外から窓を叩いたりなんかしない。叩くならドアにすればいいのだ。

(じゃあ、誰が……?)

まさか彼が、星から舞い戻ってきたとでもいうのか。

子どもを捨ててしまった罪深い私のそばに、それでもいてくれると――

勝手に期待してしまったら、私の足が動くのは早かった。頼りない足取りのまま窓に近づくと、これまで開けようとも思わなかったカーテンを一気に引いてやる。ほとんど食べていないせいかが入らず、自分の身体まで横に振られてしまった。

それでもなんとか、カーテンにしがみつき倒れるのをこらえた私の目に、映る窓の外。

そこに立っていたのは――

「シアちゃん……！」

泣きはらした目を、それでも挑戦的に私に向けてくる、彼の妹。

彼が星へ降りる原因になったのは間違いなく私なのだを知ったとき、ひどい言葉で私をなじってきた。そしてそれ以来、二度と私のもとに現れることはなかったのに。

「どう、して……」

その登場があまりにも意外だったから――半分は、がっかりして――それだけ眩くので精一杯だった。

するとシアちゃんが、表情を変えずにもう一度ノックしてきて。

「あっ、今開けるわ」

意図を悟った私は、急いで手を伸ばした。ただまわすだけの鍵なのに、どうしてもどかしい手つきになってしまう。

(緊張、しているの?)

なにに対して?

自分でもわからない。

ただ、彼と荷物を失ってから、初めて、大きく心が動いていた。

(たったひとつでも)

失ったものを取り戻せる?

シアちゃんが私を許してくれるのなら――

再び、自分勝手な期待が私を動かす。

やっとのことで窓を開けると、待ちかねたようにシアちゃんも口を開いた。

「――あの、赤い子」

「っ……！」

その反応だけで、ばれてしまったのだろう。

シアちゃんは口もとだけに笑みを浮かべると。

「やっぱり、兄貴とあんたの子なんだ? 『^{デザート・フィッシュ}砂漠の魚』のこと調べてみたらね、『

^{デザート・フィッシュ}

砂漠の魚』同士の子ならそういう色になりうるって書いてあったんだ。だから、あんたは『

^{デザート・フィッシュ}

砂漠の魚』じゃないけどもしかしてって思っちゃった」

「……………」

シアちゃんが『^{デザート・フィッシュ}砂漠の魚』のことを調べたのは、彼がそうなってしまったから?

それは自然なことだ。

でも、こんなことをわざわざ確認にくる意味が、私にはわからない。

「……だったら、どうするの?」

(お父さまのように殺そうとする?)

家族を失った自分と同じ目に、私を遭わせてみる?

醜い心が浮き彫りになる、私の目の前で。

「――じゃあ、あたしが見守ってあげる」

にかりと笑ったシアちゃんの表情は、驚くほど彼と似ていた。

すべてを包みこむように、やさしい太陽の笑みだった。

「屋敷の外に出られないリンダさんのかわりに、あたしがちゃんと見てるよ。大丈夫、あたしも人と違うんだ。こう見えて、血液に爆弾抱えて生きてるからね! 『特別扱い』に慣れてるあたしなら、あの子とうまくやってける。きっと幸せを見つけられる。そういう自信があるんだ」

シアちゃんは一度そこで切ってから。

「大好きな、兄貴の子でもあるしな」

片目をつむってしめくくった。

「シアちゃん……」

一体どういうことなのだろう?

なぜシアちゃんが急にそんなことを言い出すのか。

なにもかもがわからないことだらけだ。

――それでも。

シアちゃんの言葉があの子にとってこれ以上ないくらい心強いものであることは、誰よりもよくわかったから。

「ありが、とう……」

彼には言えなかった言葉を。

彼のかわりに。

彼とよく似た雰囲気を持つシアちゃんに。

紡いだ。

それを伝えるように落ちるのは、完全に慣れていたはずの、涙。

「おっと、泣くのは早いよ。まだこれがあるんだ」

言いながら慌てたように、シアちゃんは後ろ手に隠していたなにかを差し出してくる。

受け取って目を落とすと、それはビーズやスパンコールでかわいく彩られたオルゴールだった。開かなくてもそれとわかったのは、横からねじが飛び出していたからだ。

「これは？」

「開けてみてよ」

言われるがままに、ふたを開く。それを待ちかねたように、やさしく流れ出したメロディは。
(……全然知らない曲だわ)

少し拍子抜けした。でも同時に、まっ赤な布で覆われた内側に折りたたまれた紙を見つけて、どくりと胸が高鳴る。窓の棧にオルゴールを置いて、その紙を開いてみた。花柄のかわいい便せんの中に、性格を表すような細かい文字がびっしりと並んでいる。

「あ！ これ……」

「兄貴の持ちものを整理したら、出てきたんだ。ごめん、リンダさん宛てになってたけど、読んじやった。でもそのおかげで、兄貴は本当に自分の意思で星へ降りたんだって、わかったんだよ」

シアちゃんのそんなセリフのあいだにも、私は手紙を読み進めていた。

視界が歪んで見えなくなっても、何度も拭って先へ進んだ。

(言葉を押し殺していたのは、カイだって同じだったんだ……)

あまりにも饒舌に語る手紙は、私の足もとさえ揺るがせる。

「ちょっと、リンダさん!? あっ……」

ふらりと倒れてしまった私に、手を伸ばそうとしたシアちゃんの腕が、窓の棧に置いていたオルゴールに当たった。

「ごめん！」

意外と丈夫にできているのか、オルゴールは原型をとどめたまま床に転げ落ち――
(――！)

私に底を見せてとまった。

咄嗟に手を伸ばし引き寄せると、私はそこに書いてある文字を確かめる。

それは、きっと曲名だろう。

「『聖なる御遣い』……？」

声に出して読んだら、シアちゃんはちいさく笑って。

「それな、あたしが兄貴に教えたんだよ。昔このコロニーでかなり流行って、今じゃもう忘れ去られてるような曲だけど、ロマンチックだから大好きなんだ。わかる？ リンダさん。『聖なる御遣い』ってね、『大切な人』って意味だよ」

「大切な、人——」

それは手紙よりも雄弁に、私に語りかけてくる ^{メロディ} 想い。

(ああ、そうか)

このオルゴールが見た目よりも重く思えたのは、たくさんの気持ちが詰まっていたからなのだ。

やっとわかった。

まだ横になったままそれを抱きしめて、私は幸せを噛みしめる。

——そう、私は幸せだった。

今初めて、つらくても幸せだと感じる事ができた。

「シアちゃん、あのね」

まだ心配そうに私を見おろしてくれるシアちゃんに、身体を起こして語りかける。

「私……私はこの庭を、ずっと守っていくから」

封印してはいけないと、カイは言った。

お互いの還るべき場所を、失くしてはならないと。

(星へ降りてしまった太陽のかわりに)

私がここの太陽になろう。

生きているあいだずっと、このちいさな庭を照らしつづけるの。

いつか星へ還る日を待ちわびながら。

我が子の健やかなる成長を、願いながら——。



ねえリンダ、きみがこの手紙を読むのは、一体いつのことになるだろう。僕は最後まで自分に自信が持てずに、この手紙を直接渡すことさえできない。言いたいことはもっとたくさんあったはずなのに、きみの前に出ると簡単な言葉しか選べないんだ。

そんな自分を嫌になるほどよくわかっているから、こうして手紙に記しておくよ。

正直に言おう。

実はきみの屋敷の庭師になったそのときから、僕は旦那さまと約束をしていたんだ。もしもきみが僕を好きになるようなことがあったら、ひと月の猶予期間を経て星へ降りると。

僕のような下っ端とくっついてほしくないという旦那さまの気持ちもよくわかったし、僕自身

きみが僕を好きになってくれるはずがないと思いこんでいたから、それを受けた。なにより、シアの薬代のために給料のいいところで働きたいというのもあったから。

――でも、完全に誤算だったよ。

僕がきみを好きになってしまったことも。

きみが僕を、好きになってくれたことも。

旦那さまの指示で、きみの気持ちを確認するために下手な芝居をうってしまって、どうしようもないくらい恥ずかしくて、もう二度ときみの前に出られないかもしれないとまで思って、どんなにシアにどやされても部屋を出られなかったのに、きみは迎えにきてくれた。

僕がどんなに嬉しかったかわかるかい？

しかもきみは、僕をいちばん喜ばせる言葉まで運んできた。

僕にはきみが太陽のように見えたよ。

それから、自分の愚かさを呪った。

両想いになれたって、僕らに残された時間はたった一ヶ月だ。

僕はそのあいだにできる限りきみを愛して、同時に、星へ降りる覚悟をつくらねばならなかった。

誰かを憎んだままの心で、そこに行きたくはなかったから。

万が一そうなったときに行く決めていたのは自分で、半端な気持ちで生きたくなかったから

。 デザート・フィッシュ
『 砂漠の魚 』として星に降りたって、研究はできる。

いつかきみと交わした約束を、思い出したんだ。

星に降りても、二度と逢えないわけじゃないって。

僕がああ黒い星を青色に戻せれば、きみはきっと地上に帰還する。

誰よりも早く降りて、僕に逢いにきてくれるだろう。

そのために降りるなら、それも悪くない――

そう言い聞かせながら、僕はきみのそばで笑っていた。

別れはさみしいしつらいけれど、僕だって旦那さまの性格をよくわかっているから、あの約束は覆らない。

だから僕は、自分の意思で行くんだ。

星に降りて、きっと成し遂げる。

――だからどうか、かなしまないで。

きみに痛みを残していくことは、心から申し訳ないと思う。

でもそのかわり、僕は諦めないから。

もう一度きみと出逢うことを。

何度でもめぐり逢うことを。

諦めずに、毎日を生きたつもりだ。

いつかきみがあの星に還れるように、ちゃんと準備を進めておくから。

だからきみはきみの庭を、いつもきれいにしています？

僕がいなくなったら、きみは庭から遠ざかってしまうかもしれないというのが、僕のいちばんの心配事だったんだ。

でもそれはダメだよ、リンダ。

あの庭は僕だけのものじゃない。

きみの両親の大切な思い出の場所でもあるんでしょう？

だったらきれいにしておかなくちゃ。

そう、僕がいつでも戻れるように。

僕の還る場所を、残しておいてね。

お互いの還るべき場所を、失くしてはならないよ。

それさえあればきっと僕らは、耐えられる。

どんなに囚われていても。

心はそう簡単には、縛れないから。

……あのとき一度しか言わないって言ったけど、もう一度だけ言わせて。

大好きだよ、リンダ。

僕の『聖なる御遣い』。

どこにいてもきみの幸せを祈っている。

もう一度逢える日を、楽しみにしているから。

じゃあ――

またね。

熱さなど、感じないと思っていた。

あるのは胸の痛みだけで、痛覚から伝わる痛みなんて、ないと思っていた。

(でもそれは、私の勘違いだった)

どうして熱いのか。

どうして痛いのか。

全身が悲鳴をあげている。

誰にも見えないくせに、一丁前に声をあげている。

ありもしない瞳ではただ、彼女の姿を捜しながら。

(どうして自分なのかと)

精一杯嘆いている。

これは罰なのか。

宇宙を統べる意思は私を許さず。

この星は私に鉄槌をくださった。

比喩でなく、私の身体は切り裂かれ、そして今、燃えている。

(熱い――)

いや、違う、この熱さはきっと。

燃えている身体のせいではなく、心のせいなのだ。

私は最後まで、彼女になにもしてあげられない。

彼女を苦しめるばかりで、なんの役にも立てなかった。

このあとも、きっと泣かせてしまうだろう。

私がいなくなったら、彼女は泣いてくれるだろう。

わかっていたから、心が震え、燃えた。

身体が崩れるよりも早く、想いが飛び立つ。

(燃え尽きるわけにはいかない)

私は、ここで終わるわけには。

逢いたいのだ。

どうしても。

もう一度、出逢いたいのだ。

今度は同じ視線の高さで話せるように。

私は死ぬ前に、ここを飛び立とう。

「ねえねえ聞いて、アビエスっ。わたしね、移住前最後の声楽コンクールに出場できることになったの！」

やけに寒い日の夕方、息を切らせて走ってきた彼女が開口いちばん告げたのは、そのことだった。

『本当？ よかったですね、フィルマ。やはり先生がたは、あなたの頑張りをきちんと見てくれているのですよ』

近づいていった私が応えると、フィルマは肩で息をしながらも、顔いっぱい笑顔を浮かべてみせる。

「それもあるけど、アビエスがわたしの練習につきあってくれたおかげよ。ありがとう！」

触れることのできない私を通りすぎ、フィルマは私の本体に近づくとそっと抱きついた。

「これでいいんでしょ？ アビエス」

『ええ。もどかしいけれど、そうですね』

正直に答えたら、フィルマはちいさく肩を揺らし、それから抱きしめる手に力をこめてくれる。

(うん、ちゃんと伝わっているよ)

ちゃんと。

フィルマの、やさしいぬくもり。

樹皮と年輪をとおして、そっと届いてくる想いが、私の存在を強くする。

——そう、私はヒトではない。

この巨木の精霊。

いつの間にかヒトの姿をとれるようになり、木の周りを飛びまわれるようになった、ただの精霊だ。

しかしその姿は現在、彼女以外には見ることはできないらしく、ちいさい頃から私の姿を見ることができた彼女は、それを理由に「嘘つき」といじめられていた。

(……いや、違うな)

いじめられている。

今も。

『コンクールはいつでしたっけ？』

歌うことで自分を表現する力を認められ、音楽学校に入学した彼女。しかしいじめからは切り離されることなく、当然それは審査をする先生などにも伝わっているはずだった。そんな状況のなかでもこのような結果を出すことができた彼女は、間違いなく『正しい』女性であると思う。

(でも、褒められるのは苦手みたいだ)

褒めるといつも褒め返されるから、私はなるべく言わないようにしていた。

少しずつした話題に、フィルマも安心したのかこちらを振り返る。

「えっとね、来週の日曜日！ 場所はベルリーニの音楽会館よ。来れそう？ アビエス」

『まだ二週間ありますから、今からエネルギーを節約すればどうにかなると思います』

私がこうしてヒトの姿を取るためには、実は結構なエネルギーがいる。その姿のまま木のそばを離れるとなると、なおさらだ。そのためには普段の消費を抑えて、貯めておかなければ木の寿命を縮めてしまうことになるのだった。

「よかったあ」

心底安心したように呟いたフィルマは、そっと幹のそばを離れ、まだ浮遊する私に近づいてきた。

「じゃあわたし、しばらくはここに来ないね」

『え？』

さみしそうな声音の奥に、潜む決意は鋭い視線から伝わってくる。

「だって来ると、アビエスやさしいから出てきちゃうでしょ？」

『む……』

否定できない自分が、少し悔しい。

「わたしだってね、ちゃんと成長してるところ、見てほしいの。だから、今日からはこっそり特訓するわ。そのかわり絶対見に来てね！」

『大丈夫？』

「に、してみせる」

こぶしをつくって告げると、「じゃあ」と軽く手を振り、フィルマは駆けていった。まるで、それ以上ここにいたら決心が鈍るとでも言うかのように。

私はひょいと飛んで木のとっぺんに座り、彼女の姿が見えなくなるまで眺める。

いつものことだ。

彼女の舞台を、彼女の家族は誰ひとり見に来ないことも。

だから私はなんとしても行かなければならない。

それにこれは、私にとっても『最後』なのだ。

(移住前最後のコンクール)

それが終われば、フィルマはコロニーに行ってしまう。

地球を捨てるためにつくられた場所へ。

音楽学校ごと、移住する。

きともう一一逢えない。

彼女だってそれをわかっているから、「しばらく来ない」と告げたのだ。

私に、誰よりも成長した証しを見せるために。

(痛い、な)

精霊の私に、この世界が与えることのできる痛みなどないはずなのに。

彼女だけはやけに鮮やかに、私の心突き刺してくる。

なぜ私は自由に動けないのか。

なぜヒトでないのかと、本来ならば考える必要のないことまで、考えさせられる。

(それが嫌ではないことにも、もう慣れた)

ひとりきりで夜を迎えることにも。

立ち尽くすことにも。

答えが出ないことにも。

とっくに、慣れてしまっていた。

私は彼女が好きだった。



宣言どおり彼女は丸一週間この丘に現れず、私の話し相手は羽を休めに来る鳥たちばかりになった。

鳥相手ならばヒトの姿になる必要もないので、エネルギーを節約しながら情報を得ることができ。私は安心して彼らの声に耳を傾けるが――

『あの娘は今日も泣いているよ』

右肩の鴉に告げられても、我慢するしかない。

私も強がって、みるしかない。

『私の前でないから、思い切り泣けるのです』

私の前に来るといつも笑顔の彼女は、私からは決して見えないところで泣いていた。私がそれを知っていたのは、そばにいたくともこうして教えてくれる存在があるからだった。

応じた私の言葉に、左肩の鴉が返してくる。

『あのじいさんの遺言か。おまえはずいぶん気に入られていたものな』

『飲めと幹にお酒をかけられたことも、ありましたよ』

枝先を揺らして、私はちいさく笑った。

(レオノルドー)

いつでも思い出せる。歳を重ねたせいだけではないしわくちなな顔で、私にやさしく微笑んでくれた。

そう、フィルマの祖父にあたる彼も、私が見えるヒトだった。いや、厳密に言えば逆なのだろう。フィルマは彼の孫であるからこそ、私の姿が見えるのだ。

明らかに他のヒトと違い、純粹そのものだった彼は、ちょうど今のフィルマのように、見えることを隠さずに生きていた。また、彼の場合はフィルマ以上に敏感だったのか、私以外の精霊もいくつか見えていたようだった。

そんな彼の存在は、自然と対話できる唯一の方法として政府にまで伝わり、やがて、住みにくく汚れていくこの星を救う希望として見出された。そして晩年には、実験動物のように拘束されては身体を切り刻まれる生活を強いられていたが、それでも笑顔だけは絶やさぬヒトだった。

(その分、周りはずいぶんと大変だったようだけれど……)

ちいさい頃は私が見えていた彼の娘――フィルマの母が、私を見なくなってしまったのは、私を憎むようになってしまったのは、間違いなくそのせいだったろう。

そのことは充分にわかっていたし、私だって自分の責任を感じられないほど愚かではなかった

。だから、少しでもフィルマが幸せになればいいと願いながら、ずっとそばにあったのだ。

『人間たちは、おまえと話すことを諦めたのか？』

また、右肩の鴉が告げた。ばさりと羽を動かして。

私も葉音を立て、少しでも日陰に入るよう気をつかいつつ答える、

『どうもそうらしい』

レオノルドへの実験が失敗続きで、彼以外の誰も私を見ることは叶わず。ヒトはもう地球を諦め、宇宙に出る道を選んだ。今フィルマが私と対話していても世間から無視されるのはそのせいで、しかし私はそれでいいと思っていた。

そのほうが、フィルマは幸せになれるから。

そして――

『我らの一部はコロニーに連れていかれるようだが、おまえは？』

右肩の鴉に、即答する。

『ここでお別れです』

(そのほうが)

フィルマは幸せになれるから。

それは誰が見てもそうとわかる真実なのだ。

『それは覚悟か？』

『諦めか？』

鮮やかな色を失いつつある空に、ふたつの声が私を責める。

『けじめです』

けれど答える言葉に迷いはなかった。

初めてコロニー移住の話聞いたときから、わかっていたことだから。

その答えに満足したのかしないのか、「カァ」と口をそろえて鳴いた二羽は、大きく羽ばたいて私から飛び立つ。

『明日もまた来よう』

『いい夜を』

くるりと私の周囲をひとまわりしたあと、西の空へと帰っていった。

――しかし私にはもう、平凡な夜さえ訪れなかった。

ヒトのように意識を手放す時間帯のない私には、実のところ朝も夜もない。区別があるとするならば、太陽がのぼっている昼間は光合成などを行うため生きていることを実感でき、暗闇で少しの先も見えない夜は誰も訪れないため生きていることを疑う時間帯だった。

彼女でさえ、闇にまぎれてやってくることはなかった。

——それなのに。

(なんだろう?)

私の視界の端々に、ちろりちろりと見え隠れするちいさな光。

せめて月の光だけでもと必死にその身を伸ばす青草たちを、踏み固めるようにゆっくりと近づいてくる足音。

それも、ひとつふたつじゃない。

「あんたのせいだ！」

見えない私を相手に、ひどく罵倒していた彼女の母を思い出して、私は嫌な気持ちになった。

永い時間のなかでただひとりだけ、深夜に私を訪れたことのある存在。

その時間帯を選んだ理由は当然、誰にも見つかりたくなかったからだろう。

(ならば、今私に近づいてくる者たちは?)

疑うまでもない。

おそらく私に害をなそうとしているのだ。

(できることならば、誰も恨みたくはない)

ヒトを好きだと感じられる今のまま、別れたい。

ヒトとの決別を目の前にして、彼女の幸せを願うのと同じくらい強く、私はそう願うようになった。

けれど、望み多くわがままな私の心はきっと、この世界には受け入れられない。

この宇宙には——。

「あの子が言ったのって、この木よね？」

最初にたどりついた少女が、一度私の幹に触れてから後ろを振り返って告げた。

答える声は、次々に届いてくる。

「でしょ。この辺じゃこれがいちばん大きな木だもの」

「何百年も前から立ってるんですってね。万が一本当に精霊が見えたとしても、おじいちゃんなんじゃないの？」

「うっわー、よぼよぼの精霊なんて嫌だな」

「あれだ、コボルトっぽいやつ？」

「やだ、そんなの見たくないーい」

そして笑い声。すべて、彼女とほぼ変わらない年格好の少女たちのものだった。

「……でも、ほんとにやるの？」

そんななか、ひとりの少女が一步離れた位置から私を見あげ呟く。この暗闇では全体などとして

も見えないだろうが、それでも十分に圧倒されてくれたようだった。

しかし、すでに私の周囲にいる少女たちの意思は揺るがないらしく。

「ここまで来てなに言ってるのよ。あんただって『嘘つき』が代表に選ばれたのはおかしいって、言ってたじゃない」

「それに、もし優勝しちゃったら学校のいい恥さらしよ。せっかく高名な音楽学校に入ったのに、たったひとりのせいで泥を塗られるなんてごめんだわ」

「そうだそうだ」と、口々に擁護する声があがる。

私はそれ以上、話を聞きたくなかった。

耳をふさぎたかった。

そうしてまた、なぜヒトでないのだろうと、考えた。

(耳をふさぐ手も)

耳もない。

全身で聞いている私には、降りかかる言葉を遮断する手段がない。

死ぬしかない。

だからすべてを受けとめねばならなかった。

わかっていた。

視界を遮断するまぶたもないから、これから行われることすべて、見届けなくてはならない。

私の周りを取り囲むように並んだ少女たちは、手にしたちいさな光のもとで頷きあうと、それぞれに隠していた小瓶を取り出した。なかにはなにやら液体が入っているようだった。

「いい？ 『せーの』でかけるわよ」

もう小声ですらない声に、みな瓶のふたを開け準備する。

「せーのっ！」

私の根もと、乾いた土が謎の液体を吸いこんでゆく。

とめることはできない。

たとえそれが、私の寿命を縮めるものだとしても。

「これって、効果が出るのに二週間くらいかかるらしいよね」

「それじゃあ間にあわないよ、量を増やしてみよっか？」

「うん、明日も来よう」

「みんな共犯だからね」

「絶対内緒だよ！」

くすくすと笑いながら、囁きあう少女たち。

手が震えている者、脚が震えている者も私には見えたが、なにも言い出せないようだった。

(なにも言い出せない)

言葉なき私と同じように。

そして彼女と同じように、軽やかな足取りで私から離れてゆく。

――絶対、内緒だよ。

それは私にとっても、有効な言葉だった。

(そう、内緒だ)

彼女に知られるわけにはいかない。

毎夜もたらされる毒が、私の身体をむしばんでも。

私は彼女の頑張りを邪魔することはないし、必ずコンクールを見に行くだろう。

これも私のけじめだ。

どうせ私は、この地に残されるのだから。

消えるときは星とともに、それよりも前に少し弱ったところでたいした害ではないのだ。

(私も頑張ろう、フィルム)

永く深く地下にもぐりこんでいる根は、そう簡単には腐らない。

せめてあなたと笑って別れが言える日まで、私も笑顔でいたかった。



『嫌な臭いがするな』

『ああ、近頃嫌な臭いがする』

いつもの鴉が二羽、やってくるなりそんなことを言った。

『我が人間だったなら、多分こう言っている。「おまえ、足を洗ったのか？」』

『違うない』

そして「カァ」と笑った。

私の根もとは緩やかに変色していて、しかしまだ、私に痛みはなかった。

あるのは気だるさ。

おそらく、異常を感じ取った身体が、正常に直そうとエネルギーをいつも以上に消費しているせいだ。このままでは節約どころか、その場で人型を取ることさえ厳しくなりそうだった。

『いつからだ？ 我らのとまり木よ』

右肩の鴉が問う。

『少なくとも、あの娘が来なくなってからだな』

左肩の鴉が継ぐ。

『……………』

私は答えなかった。

答えられなかった。

彼らがなにを言いたいのか、気づいていたから。

ばさりと、軽く羽ばたき二羽はその場所を入れ替わる。

『それが答えか』

『我らになにも言うなと？』

『もともと私は、こんなふうにしな日陰しかつくることのできない存在です。そんな私がヒトの支えになれただけでも、喜ぶべきこと。私はそれを裏切ることはできません』

(ここまできたら)

最後まで彼女を支えてあげたいのだ。

無様な姿をさらして、不安になどさせたくない。

それが――私の答え。

『そうか』

左肩の鴉は葉の陰から飛び出ると、わざとだろう、いちばん高い位置にとまってから続ける。

『ならばせめて、清らかな雨が降るように祈ろう』

右肩の鴉は私の根もとまで降りると、すでに色の失くなった落ち葉をくわえ。

『ならばせめて、毒の雨が降らぬように動こう』

示しあわせたように飛び去っていった。

(ああ――)

私のために雨を望みそして、彼女たちをとめてくれるというのか。

動けない私にとって、それは本当にありがたいことだった。

葉の効果が本格的に出はじめるのはまだ先らしいが、与えられるたびにじわじわと身を這う違和感は気持ち悪い。

以前彼女が、

「コンクールに出るときはね、背筋がぞわぞわっとなるのよ」

そう話していたことがあるのだが、今の私がちょうどそんな感じなのかもしれなかった。

(やっと気持ちがわかったよ)

私が告げたら、彼女は笑ってくれるだろうか？

ぼんやりと、長いあいだ見てきた彼女の笑顔を思い浮かべながら、闇がおりるのを待つ。

二羽の鴉がどうやって少女たちをとめるというのか、疑っているわけではなかった。むしろ信じているからこそ、平穏な夜を期待して待っていたのだ。

――しかし。

深くなりゆく夜に、響くのは草を踏みしめる足音。

――しかし。

それはひとつで、しかもよく聞き覚えのあるものだった。

(まさかフィルマ!?)

もし私がヒトであったなら、目を凝らすという作業をしていただろう。

背伸びもできないくせに気持ちだけ身を伸ばして、私は足音の先を見る。

やがて暗闇にまぎれて現れたのは、間違いなくフィルマ本人だった。

その右手にある大きな懐中電灯が、きつく歯を食いしばり眉間にしわを寄せているフィルマの表情をくっきりと映し出している。

「アビエス、姿は見せなくていいからね！」

彼女はそう叫んでからさらに走り寄ってくると、懐中電灯の強さを最大にして私の根もとにあてた。どうやら、私の身に起こったことはすべて、すでに理解しているようだった。

(フィルマ……)

「あいつらが来てないか、確認しに来ただけなの。あとは、アビエスの様子も確認したかったし

」

だからやけに立派な懐中電灯を持ってきたのか。

(しかし、なぜ?)

なぜフィルマは知っている?

いくらフィルマでも、いくらあの鴉たちでも。そう簡単には、意思の疎通などできないだろうに。

私はそれを彼女に問いたくて、うずうずした。しかし問うためにはヒトの姿を借りねばならず、そうすれば彼女が最初に告げた言葉を破ることになる。

一週と数日前に、告げた言葉を。

「もう一度言うけど、出てこないでね」

それは嫌だと必死に自制する私を応援するように、不意に顔をあげた彼女の口もとが動く。

「アビエスが疑問に思っていることは、ちゃんと吐き出していくから」

諭すような口調で、あやすように、私の根をなでながら。

彼女は私が思っているよりもずっと、強かった。

「あのね、アビエスと仲良しの鴉さんがいるじゃない? わたしを特に嫌ってる女子グループを追いかけてまわしてるの、見ちゃったんだ。でね、彼女たち最近授業中にやたらとあくびするの気になってたし、わたし自身への嫌がらせは減ってたから、もしかしてって思ったの」

私の幹に背中を預け、彼女はまるでひとりごとを呟くように語る。

「あとは、これよ!」

それから首にかけていた双眼鏡を高く掲げ、私に見せてくれた。

「学校の屋上からね、これでかろうじて見えるんだよ。でも遠くから見た限りではいつもと変わらないアビエスだったから、きっと根っこのほうにいたずらされているんだと考えたわけ」

(いい推理力だ)

そんな場合ではまったくないのに、私はこっそりと笑ってしまった。

彼女はもう一度、土から一部だけ見えている私の根を見やり。

「.....ごめんね、アビエス。わたしのせいであながこんな目に遭っていても、わたしはなにをしてあげたらいいのか、わからないの」

本当はこうしてそっと触れてくれるだけで、十分に私を癒す力になっているというのに、彼女はそんなことを言う。

「もうひとつ、ごめんなさい」

彼女は。

「でもやっぱりコンクールには出たいの。絶対に優勝したい」

そんなことを。

「けどそれはね、アビエスが元気じゃないと意味のないことだから」

言う。

「コンクール、見にこなくていいよ」

(え?)

「回復に専念してて。ここからでもちゃんとわたしの声が聞こえるように、精一杯歌うわ」

彼女はそこまで告げると、立ちあがって数歩私から離れた。

そしてゆっくりと、振り返った顔には――

(あ……)

見慣れた笑顔が浮かんでいた。

「怒ったりかなしんだり喜んだり泣いたりするのは、全部終わってからのでしょう？ わたし、頑張るから！」

片手をあげて軽く振ったあと、彼女は走り去っていく。

それはあまりにもいつもどおりの光景だった。

違うのは周囲の色だけだ。

(フィルマー――)

自分のせいで私に悪意が向けられていると知ったら、彼女はコンクールへの出場を諦めてしまうかもしれない。

私はそう思っていた。

勝手に、思っていたのだ。

しかし彼女の答えは違った。

私のどんな言葉がなくとも、そこには「優勝したい」という強い意思が宿っていた。

しかも私の支えを必要とせず。

むしろ私の身を案じ。

(見にくなくてもいい)

なんて。

さみしいことを言う。

嬉しいけれど、かなしい。

やはり見にいきたい気持ちはあれど、彼女の心を裏切れない。

触れられた場所だけがやけに熱く、私の心は複雑に揺れ動いていた。

これだけヒト的な感情があってどうしてヒトでないのかと、自分でも疑ってしまうほどだ。

私は本当にヒトではないのか。

これだけ大きな想いを抱えていて、切なくて。

脳みそなんてなくとも必死に考えている。

彼女が幸せになれる方法を、誰よりも求めているのに。

今の私は言葉ですら、彼女の力になれない。

ヒトではない。

から。

ヒトにはなれない。

(――ああ)

私もいつもどおりだ。

結局はこの思考回路にも、行き着く答えにも、すっかり慣れきってしまったている。

そのことに、今さらながら絶望した。

それでもやがて降り出した雨に、少しずつ冷静を取り戻す。

「怒ったりかなしんだり喜んだり泣いたりするのは、全部終わってからのしよう？」

不意に、彼女が去りぎわに告げた言葉を思い出し、私は枝葉を震わせちいさく笑った。

(そうか、最後でいいんだ)

簡単には整理できそうにないこの感情を、きれいに並べるのは。

それから、彼女に分け与えるのは。

コンクールが終わって彼女と別れるときでいい。

それまでにはきっと、今よりもわかりやすくなっていることだろう。

(今私がやるべきことは)

彼女の望むように、回復すること。

失われた生命エネルギーを取り戻すことだ。

それだけを、考えればいい。

——彼女が喜んでくれるなら。

そんな私の気持ちと、鴉たちの祈りが通じたおかげか。

雨は三日後のコンクール当日まで降りつづいた。

(いよいよ、今日か)

一日の始まりを、どんよりと明けゆく空で実感した私は、街のほうを見やりひとつ息を吐いた――振りをした。

心を落ち着かせたいとき、彼女がよくそうしていたから。

真似をすることで、私の心も落ち着けばいいと。

(ヒトは本当に、器用な生きものだ)

改めてそう思う。

その身を上手に使いこなし、感情をコントロールするすべを知っている。

私が自分の複雑すぎる心をどうにもできないのはきっと、自由に動かせる身体を持っていないからなのだ。

だから彼女のようにうまく振る舞うことはできないし、雨宿りをすることもできない。

(そう)

実を言うと、私だってこんなどしゃ降りからは逃れたかった。回復のために水が必要なのは土の下の根だけで、できることなら葉や枝は守りたいのだ。

しかしあいにくと、私を覆い隠せるほど大きなものはこの地上にはなくて。

せめて自分の役目だけでもまっとうしようと両手の枝をまっすぐに伸ばしても、その下には誰もいない。誰も訪れない。

どうやら降りつづく雨は、私に毎夜悪夢を運んでいた少女たちを足どめするばかりでなく。礼を言いたくて訪れを待っている鴉たちをも、阻んでいるようだった。

この三日間、私は本当にひとりだった。

(フィルム……)

それでも今日ならきっと、コンクールを終えたあと彼女が来てくれる。

(私は、行かないよ)

ここで待っている。

それは彼女の言葉のせいでもあるし、やはりエネルギーの問題でもあった。ヒトの姿を取れるくらいに回復はしていても、とてもここから離れられそうにない。快調なときならばひと飛びで行けそうなベルリーニの音楽会館が、今はひどく遠くに感じた。

雨に形を変え、ゆっくりと落ちながら過ぎてゆく時間を、私はただ受けとめ待つ。

(コンクールは、きっと午後からだ)

それまでに雨がやんでくれれば、彼女の歌声がここまで届く可能性は充分にあった。なぜならこの街は音楽――特に声楽に力を入れている地域で、コンクールとはつまりお祭りなのだ。音は街中の放送網を使って空に解き放たれ、ヒトヒトの耳を魅了する。

耳のない私ですら、魅了される。

それを期待した。

何度も祈ってきた空に、もう一度、祈る。

(わがままな私を、決して許さなくていい)

少しだけ泣くのをやめてくれたら。

私はどうせ、近いうち空に戻るのだから。

死んでゆくこの星とともに、空と同化し、宇宙になるのだから。

今は。

今だけは――。

心のなかで何度も唱えながら、いつもよりもはるかに長い朝を過ごした。

正午をまわっても、降ったりやんだり、まだ答えを決めかねている空は落ち着かない。

まるで私の心を映すように。

しかしそのおかげで、ときおり私のところまで届いてくる音がある。

(あ！ 始まった……)

私はせめて耳で聴こうと、ヒトの姿を取り自分のいちばん高いところに座った。

彼女が何番だとか、何人の参加者がいるだとか、そういった情報は一切知らない。だからこそ耳を澄ます振りをしなければならなかったし、雨のノイズは邪魔だった。

(聴き逃すものか)

彼女の、最後の歌声。

きっともう二度と聴けないその歌を、私はこの身に刻んでおかなければならない。

別れても大丈夫なように。

狂ったりしないように。

(――本当は)

私と別れたあと彼女がどうなるのか。

よりも。

彼女と別れたあと私がどうなるのか。

のほうが。

(どうしようもないくらい、怖かった)

ゆっくりと死にゆく時間をどうやって耐えればいいのか。

ヒト真似では到底おさまらないような感情を、どうやってやり過ごせばいいのか。

「けじめだ」なんて格好いいことを言ってみても、結局は自信がなかったのだ。

レオノルドを亡くしたときと違い、私を支えてくれるものはもうない。

この胸に宿った思い出を、最期まで飼いつづけるしかない。

そのために、彼女の歌が必要だった。

強固な鍵が。

(最強の、呪文が――)

いくつかの音の波と、いくつかの雨を越えて。

気まぐれな空の間をつき、軽やかに鳴りはじめるピアノと、歌う声。

(フィルムだ！)

咄嗟にその場で立ちあがり、両の耳に手をあてた。

ヒトの振りをして、音のひと欠片も聴き逃さないように。

私は耳を澄ました。

(ああ……なんて力強い歌声だろう)

始めたばかりの頃は、か細い声しか出なかった彼女。

恥ずかしがり屋で口を大きく開けず、最初のうちはなかなか上達しなかった。

そんな彼女の成長を誰よりも近くで見守ってきた私ですら、圧倒されてしまうほどの出来だ。

「わたしだってね、ちゃんと成長してるところ、見てほしいの」

二週間前に告げられた彼女の言葉は、湿った空気をものともせず震わす力となって、私に届いている。

(ヒトでもないのに涙が出そうだよ、フィルム)

彼女の頑張りや、きっと私の明日を支えてくれるだろう。

(——大丈夫)

彼女はもう、私のなかにいるから。

自分に言い聞かせた、そのときだった。

一瞬だけ白く輝いた空から、再び雨が落ちはじめ。

私のかわりに泣いてくれるのか、さきほどまでとは違うやさしい降りかただった。

思わず手を伸ばして、すり抜ける雫を受けとめようとした。

かろうじて聞こえていたピアノの音を、乱暴に遮る轟音。

そしてまた、光。

(え……っ?)

一瞬。

一瞬だ。

なにが起こったのかわからなかったのも。

その起こった出来事も。

本当に一瞬のことだった。

(私の身体が……燃えて、いるのか?)

熱さを感じる器官がないから、すぐには気づかなかったのだ。

血も流れず、声も出ず、ただぼろぼろと崩れてゆく私は。

逃げることも逃げることも逃げることも、できない。

わがままな私にくだされた鉄槌は雷。

やさしい振りをした雨は、放たれた火をあおるためのものだった——。



身体を捨てて、飛び出した私が彼女と逢えたのは、音楽学校へと続く一本道の途中だった。

ヒトの姿を取っていたはずの私は、しかしもうずいぶんと薄くなっていて。もしかしたら彼女でさえ、私の姿を見ることはできないかもしれない。

そんな心配がよぎったとき、

「――アビエスっ！」

悲鳴にも似た声で呼ばれて、心から安堵した。

私の意識はもう一度だけ、はっきりとこの世界に浮かびあがってきたのだ。これが最期の力というもののなのかもしれない。

「あなた、どうしてこんなところに!? 身体、あんなにも燃えてるのに……っ！」

おそらく、早く戻って回復に専念しろと言いたいのだろう。

しかしあの状態ではもう修復不可能であることは、私自身がいちばんよく知っていた。だからこそ命が消えるよりも先に飛び出してきたのだ。

『フィルマー』

(訊きたいのはむしろ私のほうだ)

歌いおわってすぐ駆けつけたのでなければ、彼女がこんな場所にいるはずはなかった。

何度もこすったのか赤い目をして、荒い息で私を見あげる彼女の表情は、これまで一度も見たことがないほど苦痛に歪んでいた。

それでもなんとか感情を堪えるように下唇を噛みながら、彼女は告げる。

「言ったじゃない……アビエスが元気じゃないと意味がないことだって。わたしね、コンクールで絶対に優勝して、賞金が欲しかったんだよ。それでアビエスとコロニーに行きたかった。アビエスと一緒に、行けると思ってた……！」

『っ……』

(だから?)

だから彼女は、あれほどコンクールにこだわっていたのか。

賞金を得て、私の本体である木ごとコロニーに運ぼうと。

私自身がとっくに諦めていたことを、叶えてくれようとしていたのか。

私は彼女のそばに降り立つと、彼女の強い視線を受けとめる。

『ありがとう……ありがとう、フィルマ』

彼女は強いから。

もう私がそばにいないとも大丈夫かもしれない。

「見にくなくていい」と言われたとき、私はそう感じていた。

でも違った。

(フィルマも、同じだった)

私との別れを不安に思ってくれていた。

なんとかして私と一緒にいようと、考えてくれていたのだ。

「なに? アビエス、なんて言ってるの? 聞こえないよっ」

本体である木が限界に達したのだろう、私の声はもう彼女には届かない。

彼女も限界に達しているのか、涙を隠していなかった。

私は触れられない手で、それでもそっと抱きしめる。

『もう一度――もう一度、めぐり逢いましょう。今度は私もきっと、ヒトになる。私はそのた

めに、こうして身体を捨ててきたのです』

聞こえないのをいいことに、私は初めて本心を綴った。

『あなたを愛しています、フィルム』

「聞こえないってば！!? アビエス、身体がっ」

私という意識が、ゆるやかに消えていく。

私がそれを自覚できたのは、間違いなく目の前に彼女がいたからだ。

彼女の存在が、私から消えてゆく。

(忘れない)

それでも。

忘れたくない。

「っ.....わたし、あなたと絶対もう一度めぐり逢うから！ おじいちゃんが言ってたんだ。アビエスは宇宙の神さまがわたしのために喚んだ『聖なる御遣い』だって.....だからずうっとそばにいるんだって！」

聞こえなかったはずなのに、私の望みを彼女も望む。

「忘れない.....あなたがどこにいてもわかるように、歌にしてコロニー中に広めるわ。そしていつかここに戻ってくるの。この星で——」

(この地上で)

もう一度。

もう一度、めぐり逢うために。

完全に消え失せるその瞬間まで、あなたの姿をとどめよう。

「——大好きなあなたにまためぐり逢うのよ、アビエス！」

そう動く、唇を。

最期まで、見つづけた。

(約束)

私も、諦めない。

あなたが諦めなかったように。

もう諦めないから。

(いつか)

きっと。

また逢おう。

そして今度こそ、ぬくもりを分かちあおう——。

「どうしたの？ リム、さっきからぼーっとしてるよ」

ミウに言われて、ハッと我に返った。

確かにぼくの意識は完全に飛んでいた。

「ごめん、あの手紙のこと、考えてたんだ」

次の浄化ポイントに向けて、ふたりと二匹並んで歩いているまっ最中。ミウは一生懸命ぼくに話しかけていたのに、返事がないから気づいたんだろう。

「シアさんて人のこと？」

歩きながら少し話したから、ミウも大体のことはわかっている。

「うん……それと、両親のこと」

「リョウシン？」

「お父さんとお母さんのことだよ」

「リムを生んだ人ね！」

わかったことが嬉しそうに、手を合わせるミウ。

ぼくはそんなミウに苦笑しながら。

「そう。シアさんはぼくの両親を知ってたんだろうなって」

(あの手紙の書きかたは、きっとそうだ)

だけどそれを伝える最後のチャンスですら、シアさんはそれが誰なのかは教えてくれなかった。多分、伝えてしまったらぼくが少なからずその人を憎んでしまうことをわかっている——そうさせたくなくて、書かなかっただろう。それはつまり、その人がシアさんにとっても大切な人であるということだ。

不思議なことに、ぼくにはそれがどうしようもないくらい嬉しかったんだ。

「あれー？ リム、また泣きそうな顔してるよ」

「えっ!? そ、そんなことないっ」

指摘されて、慌てて目をこすった。

ミウと出逢ってから、泣いたり怒ったり恥ずかしいところを見られてばかりだ。

そのミウは、ぼくが泣きそうだとまだ疑っているのか、足をとめてまでぼくの顔を凝視して。

それから——

「うわっ、危ないよミウ！」

急に抱きついてきた。

まるで示しあわせたかのように、ウサギまでぼくの肩に飛び乗ってくる。

「あのね、こうやってぎゅっとすると、胸のあたりがぼかぼかするんだよ？」

耳もとで聞こえる、くすぐったいミウの声。

きっとミウの両親が、こうしてミウの心を穏やかに保っていたんだろう。

(——うん、ほんとだね)

人のぬくもりは、どんな感情をも吹き飛ばす力を持っている。

それを教えてくれたシアさんとミウに、何度でも感謝しなくっちゃ。

ぼくもミウを抱きしめようと腕をまわすと、待ってましたと言わんばかりに猫まで抱きついて

きた。

「うわあー!？」

「きゃっ」

でもこんな大きな猫を、ぼくたちが支えられるはずもなくで。

案の定みんなして黒く硬い大地に転がり、淀んだ大気を抱きしめるはめになった。

猫がすまなそうに顔を舐めてきて、思わず笑ってしまう。

「もうっ、こうなるってわかりきってるのに、跳びついてくるんだもんなあ」

ぼくの腕ではまだ、ミウとうさぎしか支えられない。

でもこのままこの星で生きていけたら、いつかはこの大きな猫をも支えられるときが来るかもしれないんだ。

(それまで、生きられるといいな)

最後までみんなを守ることができるといい。

そう願ってやまないぼくの手に、そっとミウが自分の手を重ねてきた。

どちらともなく、握る。

地面に背を預けたまま。

今は星が、ぼくたちのいちばん無防備な場所を守ってくれるんだ。

ミウはそれで安心したのか、機嫌よく歌なんか口ずさむ。

なりや？ なりや？

誰かは誰かの

聖なる御遣い なりや？

「……！」

(あれ?)

不思議と聞き覚えのあるそのメロディに、ぼくは驚きを隠せない。

「ミウ、その曲って」

「えっとね、お母さんが好きでよく歌ってたの。昔コロニーですごく流行ってたんだって」

「ふうん」

ミウはそれを聞いて覚えたのか。

(そうだ、ぼくが聞いたことあるのだから、きっとシアさんが歌ってたからだ)

どこか哀愁の漂うメロディが、シアさんには似合わないような気がして。

だから記憶のすみに残っていたんだらう。

「――ねえミウ」

「なあに？」

「あのさ、ずっと手を繋いでいいから、歩きながらぼくにその曲教えてよ」

ぼくの大切なふたりが両方歌うなら、ぼくも覚えなきゃいけないような気がした。

なにか意味があるような。

「うんっ、いいよ！」

ぎゅっと、手を強く握りながらミウが答えてくれる。
またひとつ、生きる楽しみが増えた。

視界の先には、まだまっ黒な重い空。
そのずっとずっと奥に、ぼくが生まれ育ったコロニーがある。

(そこにいる、あなた)

ぼくを生んだ人。

ぼくを捨てた人。

誰かわからないけど、今なら心からお礼が言えるよ。

ぼくを生んでくれてありがとう。

ぼくを捨ててくれてありがとう。

あなたがいつか還るこの星から、ぼくは伝えよう。

みんな頑張ってるよ。

ちゃんと生きるために。

還る場所を取り戻すために。

一日一日を、確かに歩いているから。

誰も心配しないで。

幸せに生きる方法を、ちゃんと見つけられたから。

あなたも幸せだといいな。

みんな、幸せだといいな。

空を見あげるたびに、祈るよ。

宇宙のみんなに届くように――。

なりや？ なりや？

誰かは誰かの

聖なる御遣い なりや？

そら
宇宙より与えられし

聖なる御遣い なりや？